



道

求



第壹號

第五卷

(明治十四年十一月二十三日種郵便物認可)

(明治十四年一月一日發行) (每月一日一圓)



求道第五卷第壹號目次

求道

◎眞諦の信仰を以て世諦を經營せよ

〔聖德太子と親鸞聖人〕

◎親鸞聖人の偉大なる所以

〔人格論〕

感謝

◎年頭感恩◎新春の頌讃◎無常の覺悟◎報謝

の經營

講話

◎眞宗の教證

聖傳

近角常觀

◎チャータカ釋尊傳

第四 富者チュルラカの話

告白

◎信界美談

管瀬芳英

◎眞宗慶嘆

慶歎

八 一念横超

嘆咏

近角常觀

◎大悲本願〔長詩〕

甲之

◎親ごゝろ〔短歌〕

増田甚

時報

◎昨年の求道會◎其後の求道學舎◎求道學舎の報恩講

講話

求道學舎

〔木郷森川町一帯地〕

毎日曜午前九時

毎土曜午後二時

第二 求道會

〔九段坂佛教俱樂部〕

毎月二日午後七時

第三 求道會

〔日本橋堀越町説教所〕

求道

第五卷  
第壹號

眞諦の信仰と以て世諦

と經營せよ

〔聖德太子と親鸞聖人〕

世の經營に力を盡し、活動を叫ぶの士が結局外部よりの附け元氣に過ぎずして、眞摯沈勇の態度に乏しく、眞個に濟世利民の結果を收むる能はざるは、内心金剛不壞の信仰なきが爲也。又近時信仰を求め内的實驗を貴ふの人が動もすれば煩悶懊惱を脱し得ずして罪惡に號泣するを以て信仰の極なりと考へ、或は一種淺淡なる微光を経験して輕妙なる樂天觀に安んじ、或は極端なる理想を憧憬して世外に天國を實現せんと妄想するが如き信仰其物が不完全にして活世界を經營するの實力を有せざるが爲也。抑々世諦の經營にして眞諦より流れ出づるにあらずんば眞の世諦に非ずして畢竟輕躁盲動に過ぎざる也。眞諦の信仰にして世諦の經營を實現する力あらずん

ば、絶對の信仰にあらずして必ずや眞諦の光に達する迄は轉發破壊すべき運命を有する者と謂つべし。

眞諦の信仰と世諦の經營と間髪を容れざること夫れ斯の如し。而かも、世諦の經營を眼中に置くものは終に眞諦の信仰を得べからず、眞諦の信仰已外に世諦の經營を認むるが如きは眞實の眞諦と云ふべからず、且つ世諦の舞臺已外に眞諦の信仰を得るの舞臺なく、眞諦の立場已外に世諦の經營を行ふの立場なし。古來或は譬ふるに鳥の兩翼を以てし、車の兩輪を以てす、兩者の相關に譬ふる頗る可なるが如きも反面二者の體を別にするが如く感ぜしむるは却て不可なり。俗世界を損てたるものにあらずんば眞實の光明を見るべからず、眞實の光明を見たるものは俗世界を救はずんばあるべからず。今世俗世界に活動せんか爲に眞實の光明を見んと企つるものは終に眞實の光明を見るべからず、眞實の光明を見たりと自認して俗世界を冷眼視し、仇敵視するが如きは未だ眞實の光明を見ざることを自證するものに非ずや。

數年來信仰を求むるの機運漸く熟す、人皆口を開けば信仰を叫ぶ、其求むる所を聞くに皆曰く、我世を救はんが爲に信仰を求む、政治を經營せんが爲に信仰を求む、實業界に活動



せんが爲に信仰を求む、教育の根底を得んが爲に信仰を求む、人格を高めんが爲に信仰を求む、自己を修養せんが爲に信仰を求む、道徳を行はんが爲に信仰を求む、意思を強めんが爲に信仰を求む、煩悶を慰せんが爲に信仰を求む、安心立命せんが爲に信仰を求む、曰く何の爲め、何々の爲めと。遂に信仰は或目的の爲の手段に過ぎざる也。手段として求むる信仰は第二義に落つるもの、最も不眞面目極まるものと謂つべき也。抑々我等は人を救ふことを考ふる前に先自ら救はるべき罪惡の徒たることに氣付かざるべからず、信仰已前に口にする政治、實業なるものは畢竟野心名利の巷にあらずや、教育、人格、修養、道徳を口にする前に吾人は果して此の如き地平線已上の問題に着手し得べき資格あるや否やを自省せよ。吾人自ら願れば罪惡深重の塊肉、既に九泉の下に墮落せるものに非ずや、何等の教育修養があらん、何等の人格道徳があらん、意思薄弱、煩悶懊惱、地獄必定、吾人は一刻一時も安んずる所なし。此に忽爾として佛陀慈光の攝取を蒙り、如來救濟の勅命を聞く、信仰は手段に非らず、唯一の目的也。嗚呼地獄は必定すみかぞかし、此の如き煩悶の徒に向て佛陀は大慈の涙を灑ぎたまふ、我等懦弱怯劣の輩此の如き大悲の願力に乘

德太子已後に親鸞聖人あり、眞諦の信仰を以て世諦を經營するの妙趣初めて人世に顯現す。

## 二

佛教固より大小乗の區別なし。大聖釋尊世上の常樂我淨の快樂をすて、入山學道したまひ。遂に苦空無常無我の眞相を悟りして解脱涅槃の光明界に入りたまふ。遺弟末だ其光明に達せず、徒らに律法的に苦空無常無我の修道に拘泥して消極退嬰世外に隱遁し、絶對涅槃の妙境を仰ぐに由なし。此に於て佛教自から化石して小乗となり、大聖の本意は大乗となりて如來の靈境を開闡して常樂我淨の涅槃の四德を説かざるべからず。吾人以爲らく佛教史上難關とする大小乗の問題も實際の見地より看れば畢竟律法と信仰との問題に過ぎざる也。之を現時社會の實況に比説せんか、今世滔々たる物慾主義は皆是常樂我淨の自我快樂の榮華に非ずや。人一人たゞ眞面目に人生問題に想到するや自から其苦を觀し無常を觀ぜん、しかれども吾人徒に其苦に泣き無常に泣き、我を捨てんとして捨つるあたはず、人空なりと觀するも而も解脱するあたはず、遂に悲觀煩悶主義に陥る所以のものは未だ大悲の光明の常に照したまふを知らざれば也。人生海に苦痛也、無常也、然れども

ぜは、天下到處處光明の廣海たらざるべからんや。釋尊生老病死に驚きたまひて遂に生老病死を解脱したまひ、國家王位をすてたまひて遂に國王大臣を感化したまふ、自身を以て自身を擧ぐ可からず、吾か手を以て吾床を動かすべからず、世を損てずして世を救はんとなす。嗚呼抑々亦難い哉。

聖德太子曰く、世間虚假、惟佛是眞と、親鸞聖人曰く、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はみなもてそらごと、たわごと、まことあることなきに、ただ念佛のみぞまことにておはしますと。嗚呼世の眞實は佛陀也念佛也、茲に眞諦の光明燦然として世界に赫灼たり、三界の教主大聖釋尊印度に出てたまひ、國と位とを捨て、俗世界を救ひたまふ、而して和國の教主聖德、其佛陀の眞實を認め却て位にありて國を治め虚假の世間を經營したまふ、念佛の元祖法然聖人如來の選擇本願を開宣し諸行をすて、念佛の一行を本としたまふ、而して眞宗の高祖親鸞聖人其念佛の眞實を信じて無戒在俗の有様にし、て直に如來攝取の光明海中に生活したまふ。嗚呼大聖釋尊俗世界をすて、眞諦に入り、聖德太子は眞諦を以て俗世界に處したまふ。法然聖人は世間をすて、念佛に入り、親鸞聖人は念佛を信じて俗世間に入りたまふ、釋尊已後に聖德太子あり、聖

如來の光明は常住清淨にして大悲憐むことなくして不斷に我を照護したまふ、苦空無常無我の世界首を回らせば即ち常樂我淨の靈境にあらずや、是れ大乘佛教の眞光景、蓋し印度支那に於ては教理として大乘圓融の妙趣を開顯せりと雖、之を人生上に實踐して世諦經營の上に實現せしめたまひしもの、實に和國の教主聖德皇の恩德に非ずや。太子常に宣く日域大乘相應地と、自ら佛子勝鬘と稱して、十大受の精神を以て國家を經營し、惟摩默不二の妙趣を體得して眞諦即世諦の眞義を實現し、法華一乗の精髓を味ひて諸法實相の靈境に遊びたまふ、太子一代の聖蹤古來儒者の解すべからざる所以のもの、所謂難解難入の眞諦の光明を徹照せざれば也。

物部氏の誅代は、拆伏門として避くべからざる戰也、蘇我氏の罪を問はずして一族之か犠牲たるをも辭せざるは攝受門の惠也、家庭生活を爲して如來光明の中に團樂し給ふは同事行也、攝政の笏を正しくして君臣の義を明らかにし給ふは眞諦より來る光也、塵尾を握て獅子座に上り三經の講説を爲したまふは世諦を經營する生命也、十七憲法は根柢を三寶を敬する所に求め、諸寺の經營は悉く天下泰平の基を開かざる所なし、三韓は信仰より來る仁政を以て悦服せしめ、隋唐の交通



は、自覺より来る禮讓を以て畏敬せらる、當時の美術は浮華の爲ならず、當時の建築は奢侈の爲ならず、當時の文藝は快樂の爲ならず、當時の音楽は遊戲の爲ならず、皆是太子自ら身命財をすてて正法を攝受せんが爲のみ。況んや四院をたて、孤獨幽繫、疾病種々厄難困苦の衆生を救済したまふに於てをや。吾人乃ち知る、日本文明の淵源は近世の所謂人間を本として來れる文明に非ずして、如來の光明を人生に實現し、莊嚴せるが爲に來れるものなるを、尊むべき哉、王、妃、母、公、三骨を磯長の靈廟を止めて千古信仰的家庭の跡を垂れ、三尊一體として眞如實相の淨土に歸りたまふをや、實に日本大乘佛教の教主と謂つべし。

維新已後國家社會百般の經營頗る著しと雖、皆經營の爲の經營にして未だ眞諦の光輝を發揮せざるや最憾とする所也、日露戦争は一面人生の悲劇を實驗して漸く其自覺の光明を憧憬するの向上的傾向を生み來りたりと雖、一面は徒に成功を追ひ、活動を呼號して一代の人心は勢力と利慾の下に集りて益々墮落し去るのみにして、世諦の經營毫も眞諦の信仰より淵源する者なし、嗚呼痛ましき哉。對韓、對清乃至對米對歐、最も眞摯なる信念を要するの時也。明治時代は開闢已來第二の

歸命盡十方無碍光如來と宣ふ、豈故なしとせん哉。

親鸞聖人の求道及び得信が聖德太子に因縁ある一日の事にあらず、殊に眞諦の光明を以て世諦生活の上に實現し、家庭在俗の生活悉く如來光明の慈懷中に攝護せられたまふと全く佛陀の靈告を感じ、太子の芳躅を追ひたまふこと明瞭なる事實とす。此に於てや聖德太子の大乘佛教は遺憾なく親鸞聖人の眞宗によりて發揮せられたるもの也、吾人若し、太子の偉績を仰ぎて其功業を追ひたてまつるの舉に出でなば、遂に眞諦の光明に接するあたはざるべし、而して親鸞聖人は其眞諦の光に至心信樂の一念、如來大悲の廻向を蒙ることを示したまふ是即ち金剛不壞の眞信也。聖人曰く、『乃し如來の加威力に由るか故に、博く大悲廣惠の力に由るか故に、遇々淨信を獲ば是心顛倒せず、是心虛偽ならず、是を以て極惡深重の衆生大慶喜心を得て諸の聖尊の重愛を獲る也』と、是眞諦の光明の來る唯一の源泉也。今世の聖德太子を慕ひたてまつるの人、徒らに太子の政治、外交、文明、文藝、慈善、家庭、世諦顯現の偉績を追はずして、親鸞聖人の宣説に信順して如來選擇の願心に發起せられて唯金剛不壞絕對不二の眞信を獲得すべき也。二十世紀全世界の眞文明は必ず是より起らむ。

開國時代と謂つべし。而て未だ國民第二の聖德太子の精神を追ふことなき豈慨すべきの至ならずや、さらば如何にして大乘眞諦の光明を此の如きの濁惡世界に輝すを得べきや。

大聖釋尊の教、廣くして且遠し、是聖道門の名の依て起る所になり。若し説の如く行ひ得べくんば、聖道門、洵に可也、如何せん廣遠微妙の教も濁惡世界に於ては遂に之を實行するに由なし、恰も律法主義に陥て佛教を化石して小乗たらしめたるが如く、聖道門も實行問題より見れば第二の律法主義にして難行道の名を得る所以也。此に於てや法然聖人初めて淨土易行の一門を開きて選擇本願を宣布し、南無阿彌陀佛の一行を票示して大小の聖人、重輕の惡人を招きたまふ。親鸞聖人其名號を聞き其本願を至心信樂して一念開發する時如來光明中に攝取せられたまひ、煩惱成就の凡夫人、煩惱を斷ぜずして涅槃を得と宣ふ、此に於てや聖人自ら愚禿と稱し、在俗無戒の有様を以て眞の佛弟子として大悲無倦の光益を感謝したまふ、是現代の如き無邊の極濁惡の世界を救済し給ふ唯一眞諦に非ずや。而して此絕對不二の眞諦の光明は日本現代の濁惡世界を照耀する光輝たるのみならず、恐らくは八紘に光被して二十世紀世界の闇黒を照破するの光たらんか、聖人歎じて

## 親鸞聖人の偉大なる所以

〔人格論〕

親鸞聖人の偉大なることは漸く世上に知らるゝの機運が來りたるやうである。世は澆季の黒雲に蔽はるゝ程、聖人の光明が自然にあらはれ來るのである、淨教西方の先達、眞宗末代の明師なりといふ嘆徳は如何にも剴切なる讚嘆の言である。かくの如く聖人の偉大なるは何故であるか、從來眞宗の流を汲みた信者は習慣的に佛陀と同地位に置きて尊崇する次第であるが、未だ佛陀の大慈を味はずして、佛陀と同地位に崇むるは聖人をして遂に世外の人たらしむる所以である。亦近時聖人の遺書を繙き、其歴史を辿りて其人格の偉大なるに驚くの人ばかりの如き偉大なる人格を作り來る中心の信仰其物を十分に認めぬ憾がある。嘗に近時初めて聖人の偉大なることに氣附きたる人が之を知らざるのみならず、古より聖人の偉大なることを説きつゝあるものが矢張り亦其偉大なる所以を了解せぬ憾がある。

抑々吾々が言語に力を入れて偉大偉大と反覆稱讃するが如きものは絶対の偉大とは言へぬ。言を換へて之を言へば我等



が稱へて偉大たらしめんとする偉大の如き、眞の偉大ではない、たとへば聖人が卑謙の徳を嘆ぜんか、聖人自ら稱して愚禿といひ、弟子一人もたずと宜ふ。併し聖人の卑謙なるものは、世の所謂謙遜とは大に趣を異にして居る。普通の謙遜なるものは、自己が居るべき地位に居らずして、自ら下卑することである。自己の有する價值を價值だけあらはさぬことである。即ち他の人に對して自己を下に置くことである。畢竟人間同士の間柄に成り立つ相對的の問題である。若し人間同士の問題とすれば、如何に卑謙しても中心より來らぬものである。而して絶對的の謙遜といふことはあり得ぬものである。しかるに聖人の卑謙は此等の世間の謙遜とは全然其立場を異にしてゐる、即ち絶對的の謙遜である。絶對的の謙遜とは即ち聖人が佛陀に對せらるゝ態度である、寧ろ謙虛とても申すべきである。即ち佛陀に對して自己といふものの價值を一點も認めぬことである。其絶對的に謙虛なる態度を拜するときは絶對的に崇高なる聖人の人格が知らず識らずの間に吾人の眼に現前する次第である。世人が其人格の偉大なることを量り知ることの出來ぬのは、畢竟此佛陀を根底とすると、即ち信仰より來る絶對的態度たることを着眼せぬからで

ある

歎異鈔に、親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよきひとのおほせをかうぶりに信するほかに、別の仔細なきなりとある。聖人の師教に對して絶對的信順の態度をとりたまふことは誰知らぬものはない。されどこの絶對的從順の態度は唯世間普通の奉事師長の道徳より來りたるのではない。奉事師長の爲にせられたる從順ならば、唯無理やりに盲從することである。法然上人にすかさねまゐらせて、地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候といふのは、師匠の仰せゆへ、何でもかまはぬと力味て任したことはない。しかれば如何なる意味かと云へば、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしといふ仰せ其物を信じて疑ふことが出來ぬのである。たゞ念佛してたすけられるといふことは即第十八願の意義である。即ち選擇本願これである。其選擇本願を説かれたのが、法然上人の仰せである。即ち本願其儘が法然上人の仰せなるゆへに、其本願を信すること即ち法然上人の仰せを信することである。夫故に下の文に、彌陀の本願まことにおほしまさば乃至法然のおほせそらごとならんやと申された所以である。若しこれを親鸞聖人が師教に從順なる外面

の態度のみを見て其來る源を知らずんば、却て聖人は力味心より來る律法的の服從をせられたるが如く見えることになる。

抑々法然上人が選擇集に選擇本願を説きたまふに、彌陀の本願には布施の行も、持戒の行も、忍辱、精進、禪定、智慧、皆選びすて、念佛の一行を選びとりたまふたのである。又起立塔像、飯食沙門乃至孝養父母、奉事師長を選びすて、念佛の一行を選びとりたまふたのであると、きはよく示されてある。たゞ念佛してたすけられるとは此意味である。聖人は此本願即ち法然上人の仰せを信ぜらるゝのである。念佛はまことに淨土に生るゝためにてやはんべるらん、また地獄に墮つる業にてやはんべるらん、總じて以て存知せざるにも拘はらず、之を信ぜねばならぬは本願夫自身を疑ふことが出來ぬからである。若し何等の意味もなく師教なるが故に之に無理やりに服従するといふならば、寧ろ彌陀本願に反する次第である。何んとなれば選擇本願に於て、奉事師長は孝養父母と共に選びすてられたる非本願の行である。親鸞は父母孝養のために一遍だも念佛申したること候はずとのたまへる聖人は亦、親鸞は奉事師長のために一遍にても念佛申したること候はずと宜ふことは疑ふべからざることである。奉事師長の爲

に本願を信するのではない。本願即ち師教なるゆへに本願を信するのが即ち師教に信順するのである。本願に對する信仰が直ちに師教に對する絶對的態度其物となるのである。

かくの如く本願即ち師教に絶對に信順したまふゆへに聖人自身に於ては絶對に謙虛なる態度を生ずるのである。愚禿鈔に聞賢者信一顯愚禿心、賢者信内賢外愚也、愚禿心に内愚外賢也とあるは、此絶對信順、絶對謙虛の態度を示したまひて餘蘊なきものである。聖人が法然上人を讃嘆して眞宗教證典片州、選擇本願弘惡世と宜ふ如き實に此に原因して居る。一面から言へば自己の功を師に譲られたるが如く見ゆるもそれは人間的の俗情である。聖人の淨土眞宗教行信證は師教の外に一點の私を狭まぬものであるゆへに。又一面から自己の説を強て先師の説たるが如く思ひ做す様に見ゆるも人間的の俗情の誤見である。何んとなれば師教の選擇本願に絶對的に信順された結果が即ち眞宗自身であるのである。

全體親鸞聖人は世上より見れば、頗る英邁果斷の天資にして、法然上人已外に一、新機軸を出し、肉食妻帯の宗風を開かれたといふ様に考へられる。或點に於て謙虛從順といふことと兩立すべからざる人格であるかの如き疑を生ずる。されど



是亦世上の人格論を以て見たる俗見である。聖人は外部に實現したるところにては英邁果斷たりしには違ひなければ、日蓮上人が自信より猛進された如き態度にあらずして、寧ろ前記の如き絶対的の謙虚從順の態度より来る自然の結果である。前にも引きたる撰擇集に撰擇本願を述べたまふに、彌陀の本願は持戒のものを往生の業となさず、念佛を取りたまへり、若し持戒を以て往生の業となさば、持戒のものは往生することを得るも、破戒無戒のものは往生することを得ず、故に戒をすて、念佛一行を取りたまへりとある。聖人は此本願即ち師教に絶対に信順して、無戒の儘にて念佛したまひたのである。

和語燈錄に或人問て曰く、持戒の行者の念佛の數遍のすくなく候はんと、破戒の行人の念佛の數多く候はんと、往生の後の位の淺深いづれか進み候べきと。法然上人居てまします疊を押へてのたまはく、此疊のあるにとりてこそ、破れたるか、破れざるかと云ふ事はあれ、つや／＼なからん疊をば何とか論ずべき、末法の中には持戒もなく、破戒もなし、唯名字の比丘計りありと、傳教大師の末法燈明記に書き給へるうへには、何と持戒破戒の沙汰をばすべきぞ、かゝる平凡

夫の爲めに發したまへる本願なればとて、いそ／＼名號を稱すべしとある。これ特に上の阿彌陀佛本願に於て持戒をすて、念佛を取りたまひたる本意を明瞭に示したまひし師教である。而して聖人は此師教の儘に絶対に信順して實行したまひし結果か、即ち無戒名字の比丘として、遂に肉食妻帶の宗風を實現せられたのである。世人より見れば英邁果斷を以て新機軸を出されたるが如く見らるゝの點は、何ぞ知らん師教に絶対的に信順して、全く一點も私なく實行したまひし結果ならんとは。既に絶対信順なるゆへに、たとひ法然上人にすかされまゐらせて地獄に落ちたりともさらに後悔すべからずとの己を空しくしたる謙虚なる態度が来る。此謙虚なる精神より知らず識らず自然法爾に實行したまふ故に、少しも力味力なくして知らぬ間に斷行も出來れば、革新も出來るのである。其結果淨土眞宗となつたのである。

己上は唯謙虚の徳といふ一點より聖人の人格を仰ぎ、其偉大なる根底は畢竟聖人が内心に於ける佛陀に對する絶対的信仰より流れ出づることを跡づけた次第である。其他如何なる點より辿りても必ず聖人の絶対の信心其物に淵源すること、同様に跡付けることが出来る。而して此信心は聖人の宣

感

謝

### 年頭感恩

如來慈光の照耀は千古渝るところなく、常に我身を惠みたまふと雖、我等にとりては曆を改むと共に、ひたすら感恩の情に堪へざる也。年頭は恰も嶺の頂上に立つが如し、既往の足跡を顧み前途の方角を望む、吾人年頭に遇ふ毎に一種言ふべからざる清新の感を抱かざるはなし、既に過ぎ來りし年頭を回想して人生の行路を追憶することは、恰も越へ來りし山々を顧みて崎嶇たる羊腸を想ふが如し、いかてか如來大悲の照護を蒙らずんば何ぞ今日の吾人あらむや、洵に高峯頂上日出るの處滿身の感謝を捧ぐるの想あり、亦前途を望めば青峯青巒を開きて我等を笑ひ迎ふるが如し。此人生に於ける唯一の希望は永久我等を照したまふ慈光なり、人生の行路に悩みて啣ち勝なる我等も新年の山頭に立つ毎に無限大悲の恩徳に感泣せずんばあらず、南無阿彌陀

### 新春の頌讚

歸命無量壽如來、南無不可思議光。





彌陀成佛のこのかたは

いまに十劫をへたまへり

法身の光輪さほもなく

世の盲冥をてらすなり

嗚呼十劫已來常恒不斷に我等を待ちたまへる如來慈父の御心それいくばくぞ、無量壽洋々として海の如く、無量光赫々として日の如し、豈盡十方無碍の光明を顯せざるべけんや

### 無常の覺悟

萬歳の壽の代りに念佛を唱ふべし、一休和尚の戒しめたまひし如く、冥途の旅の一里塚なり、往生十因に曰く

嗟乎去り去りて來らざるは盛なる年、残りの日稍闕なり、來り來りて去るなきは衰へたる齡、餘の年復幾くぞや、是を以て心を小水の魚に澄して、露命の日々に減ずるを歎き、念を屠處の羊に係て、無常の歩歩に近づくことを悲む、況んや世間は春來の夢、榮華何ぞ實ありん、人身は水上の瀛浮生誰か留らん、山海に陰れし仙も未だ無常の悲を免れず、石室に籠りし人も終に別離の歎きに遭へり、實に一生は假棲豈永代を期せん乎、

信卷曰く、

## 講話

### 眞宗の教證

〔求道學舎日曜講話〕

近角常觀

今日の題は「眞宗の教證」と言ふのであります。先月は親鸞聖人の御正忌の時節に當るので、先日來到る處で聖人の報恩講が営われました。又今年より御往生の當日を以て此の學舎の報恩講を営む事に決めまして、拾一月廿八日の晩に學舎中集まつて有り難く報恩講を修行させて頂きました。其の様な譯で私は此頃ことに聖人の御在世を思ひ御教化を喜ばせて頂いて居る。今日も「眞宗の教行信證」といふ聖人一代の御勸めのごく肝要をお話し致さうと思ひます。

我々より頂くと親鸞聖人御一代の御教化は此の「教行信證」の外に無く、「教行信證」は實に聖人御製作の根本聖教である。併しなから親鸞聖人の御言葉で頂く時は、其の「教行信證」といふ事は聖人御自身が發明なされたもので無く、御師法然上人の御教化が此「教行信證」の外無かつたのである。故に聖人の「正信偈」には

本師源空佛教を明らかにし、善惡の凡夫人を憐愍せしむ、眞宗の教證を片州に興す、選擇本願を惡世にひろむ。と申されてある。法然上人御一代の御教化は眞宗の教證を日

大信心は則生長生不死の神方、祈淨厭穢の妙術  
愚禿鈔曰く

本願を信受するは前念命終なり

即得往生は後念即生なり

他力の金剛心也と知るべし

便ち彌勒菩薩に同じ

### 報謝の經營

吾人は過去を顧るごとに尸位素餐、佛祖海山の洪恩に對して恐懼措くところを知らず、又多くの御同朋に向ひて慚愧に堪えざる也、大悲傳普化、眞成報佛恩、吾人報謝の經營は此外になし、縉紳の人も佩劍の人も牙籌をとる人も、耒耜をとる人も、各々悲を仰ぎて其有縁の業務をとりつゝ念佛せよ、知らず識らず、常行大悲の御徳を實現せしめたまふべし、是我等此世にあらんかぎりの報謝の經營也、吾人相師めて粉骨碎身之に従はんかな



本に興し、彌陀擇選の本願を五濁惡世に弘めて下された、其の外は無いと聖人は喜びなされたのである。其の親鸞聖人が法然上人より頂かれた「教行信證」を、又我々は今日迄お互に頂いて來たのである。で眞宗の「教行信證」といふ事は、親鸞聖人より言へば法然上人より傳へられた眞宗の骨目、又我々より言ふ時は親鸞聖人より頂いた一宗の骨目であります。

此前の講話に於ては、一代佛教が難行道と、易行道との二つに別れ、易行の一道によつてのみ我々は行く事が出來るといふ事を、佛教全體の上よりお話しして置きました。

今日も少し事の筋道を辿つて話さうと思ひます。易行道は佛教全體の味を、唯念佛の一法で頂くといふ念佛三昧、一行三昧の教へであるが、抑も之は如何なる具合で出來たのであるか、言ひ換ゆれば釋尊一代の御教化を後世斯の如く容易に頂くやうになつた發達とても申しませうか、前回の講話に於ては即ち先づ此點よりお話ししたのである、併しながら斯の如く廣大無邊の一代佛教を唯南無阿彌陀佛の一で頂くといふ事は、本來佛教に有つた事であるが、或は又無き所のものが後に到つて出來たのであるか、先づ其源から窮めて來ぬばならぬのである。

處で既に此前にも申した如く、此他力の念佛は我々が佛法を頂く上に成る可く頂き易いやうに自然に發達して出來た便利の爲めの念佛では無い。其根本は次の一言である、即ち法然上人の「撰集」の中に、念佛の一法は自然に來つたもので無くても、もと阿彌陀佛の御手許に於て、此の念佛の一法を以て一切の衆生を救ふとの深重の本願がある、此本願より顯



はれ來つた念佛である。と仰せられてある。これでありませう。其撰擇本願念佛といふは何うかといふに、阿彌陀佛が一切衆生を助け給ふに此の先きにも申した如く、修行や戒行を以て助けると仰せられぬ、唯念佛の一行、南無阿彌陀佛一つで助けると、特に念佛一つをお撰び下された。極言すれば修行でも助けぬ、戒行でも助けぬ、禮拜や讃歎でも助けぬ、唯念佛の一つで助けるのと、もとく佛の本願の御誓ひである。其の佛本願の御恵み、其の御親心、其佛の五劫の御苦勞、永劫の修行、其佛の慈悲、智慧、光明、之等の凡てが凝つて佛の本願南無阿彌陀佛の一行が出来揚つて下されたのである。故に一念我々の身に此の念佛の頂け見れば今に到つて初めて顯はれ給ひた念佛にあらず、大悲の親の大も、に於て、我名を稱へしめ、知らしめ、衆生の心に届け入れて、一切衆生を救はんと既に發願の初めに於て我々衆生の爲めに撰擇して置いて下された念佛である。此の切なる大悲の御親心の根本が即ち撰擇本願であります。成程釋尊一代の教法一代佛敎を出立點として考ふる時は、一代佛敎より來りたる念佛には相違なけれども、一つ源に逆上ぼり見れば既に永劫の昔に於て佛が十方衆生に向はせられ、其哀々たる大悲心より、此の念佛を届けて佛の恵みを知らしめんとの本願である。念佛はもう此の時既に我々の上に與へられてあつたのである。而して此本願、恵み、慈悲、親心、御苦勞こそ抑々佛敎の根本、佛陀の根本であります。

一佛即一切佛と言ふ時は諸佛の境界は皆夫々同一であるやうにも思はれます。けれども阿彌陀佛の本願より言ふ時は、

佛であるといふ事を申し上げたのである。即ち彌陀佛が念佛の一法を業に既に先天的に―若し先天的といふ言葉が用ゐられるならば念佛の一法を定め置いて下されたのである。其先天的に念佛の一法を以て救ふとの御恵み、御本願が撰擇の本願であります。而も其南無阿彌陀佛の意を十方衆生の心に届かしめ、知らしめ、稱へしめそうして十方の衆生此の名字を稱へん者は、悉く我淨土へ迎へ取らんとの廣大の本願である。此の本願こそ實に我々が救はれる根源であります。

釋尊御一代八十年の間、或は華嚴經に於ては廣大なる佛陀の境界をお説き下され、又涅槃經を説きては如來常住無有變易の妙諦を御敎を下された。けれども之を要するに親鸞聖人の信仰より言ふ時は、一代敎中如來とあるは皆阿彌陀如來の廣大の境を言はれたのである。光明とあるは阿彌陀如來の光明を指されたのである。慈悲とあるは阿彌陀如來の慈悲を示されたのである。一代藏經に有りとする事、皆此阿彌陀如來の廣大の恵みをお説き下されたに外ならぬのであります。

而して殊に大無量壽經は、此佛陀の本願を正面よりお説き下された經であります。先日來段々お話致した阿彌陀佛本願の大本を明かにして下された御經か實に此大無量壽經である。親鸞聖人の敎行信證の敎は實に此大經より來つたのであります。一寸考へる時は、澤山なる一代佛敎中に於て、阿彌陀佛本願一つが眞實である、他は皆不眞實であると言ふと、甚だ我が佛貴い言ひ方の様に聴こえますが、併し親鸞聖人の信仰より言ふ時は、唯一絶對の阿彌陀佛の本願こそ實に全佛敎の根本である、十方諸佛稱讚の彌陀の本願である、大聖釋尊

諸佛のさとの境界も、諸佛の夫々の説法も外の爲めては無い、唯此の阿彌陀佛の本願の恵みを知らせるが爲めに夫々の諸佛となつて現はれて下されたのである。經文の中には三世諸佛依念彌陀三昧成等正覺とある。又聖人の和讃には彌陀の淨土に歸しぬれば、すなはち諸佛に歸するなり

一心をもちて一佛を ぼむるは無碍人をぼむるなりともあります。彌陀一佛に歸する事は即ち十方の諸佛に歸する譯である、とは何うかといふに、華嚴經の文に

法王は唯一法なり、十方の無碍人一道より生死を出てたまへり、一道とは一無碍道是なり、

とある。一無碍道といふは念佛無碍の一道であります。十方の諸佛は皆此念佛の一法によつて廣大なる佛陀の境にお出なされたのである。故に其の十方諸佛は亦阿彌陀佛の本願の親心を十方の衆生に説き聞かせて下さるより外は無い。故に阿彌陀佛の第拾八願は、十方の衆生に我名を稱へしめて悉く救はんとの根本の本願であるが、先づ其本願を十方の衆生に知らせんが爲めに、佛は第十七の願に於て、

設ひ我佛を得んに、十方世界の無量の諸佛悉く啓喙して我名を稱せずば、正覺を取らじ

とお誓ひ下された。此は十方無量の世界に於て、吾が本願を言ひ放たしめ、念佛を知らしめて十方無量の衆生を悉く救はしめん、との大悲本願である。今日は其南無阿彌陀佛の一法は釋尊が此世に出て給ひて始めて來りたので無く、亦其後に發達して來たのでも無く、もとく阿彌陀佛の撰擇本願の念

の此世に出興して下されたも唯此本願海を説かんか爲めてあるとなるのです。聖人は『正信偈』に於て宣はく、

如來世に興出したまふゆへは、たゞ彌陀の本願海を説かんとなり、五濁惡時の群生海、如來如實の言を信ずべし。

又大無量壽經の中には釋尊自ら仰せられて曰く、

如來无盡の大悲を以て、三界を矜哀し給ふ、世に出興し給ふ所以は、道敎を光闡して群萌を拯ひ、恵むに眞實の利を以てせんと欲してなり。

とあります。勿論釋尊は色々の教法をお説き下された。或は修行をせよと勧められ、或は戒行を保つ事が必用ぢやとお説き下された。併しながら此等は皆釋迦法と言つて、釋尊御自身の教法をお敎を下されたものである。釋尊が此世に出興して下された眞の結局は唯此の本願南無阿彌陀佛の一法を我々に知らしめん爲めの御導きに外ならぬのである。我々は此處をよく―頂かねばならぬのであります。夫て釋尊一代の教法中より眞實の敎を拾ふ時は實に此大無量壽經一部である。聖人は敎行信證『教卷』の劈頭に次の如く仰せられてあります。

夫れ眞實の敎をあらはさば、即ち大無量壽經これなり、この經の大意は、彌陀ちかひを超發して弘く法藏をひらき、凡小を哀れみて選んで功德の寶を施することゝいたす、釋迦世に出興して道敎を光闡して群萌をすくひ、恵むに眞實の利をもてせんとおぼしてなり、こゝを以て如來の本願を説くを經の宗旨とす、すなはち佛の名號をもて經の脉とするなり。云云

抑々大無量壽經は眞實の敎である。佛敎の根本彌陀佛の本



願を説いてあるが故に眞實の教であります。猶ほ進みて此意味から世間の學問に志す方々の爲めに、殊に宗教哲學等を研究なさる方々の爲めに一言申しませう。上に言ふが如くで一代佛教には澤山なる種々の法がある、或は道德を奨励した教法もあれば、又山間に隱遁せよといふ厭世的の教法もある。けれども其肝要は佛陀のさとり、の境界より罪ある人間の世界を眺めて、罪ある者を救ひ上げる處が實に佛教の根本。否凡ての宗教の宗教たる點であります。而して其根本肝要の顯はれたのが、彌陀大悲の本願力である、如何にも華嚴經の中には廣大なる佛陀の境界が説かれてある、又成程涅槃經の御說法は崇い。けれども此等は皆宗教の宗教たる要點を無し。又人間の立場より考へて如何程道德を説いた處が、人間の立場より來た道德故所詮駄目である、宗教の肝要、佛教の佛教たる所は斯る人間の道德や、又廣大なる境界を説き下された點では無くして、此の廣大なるさとり、の境界より、大悲の哀の御親心を以て、罪に悩める我等を救ひ取つて下さる御本願、此こそ實に佛教の至極、宗教の極致であります。以上は特に宗教を學術的に見て居らるゝ方の爲めに申したのである。

されば釋尊は徒らに親の財産を陳列して見せて下されたては無い、此の哀なる十方の衆生に如來の本願を教へ、久遠劫來待ち受け給はる切なる大悲の御親心を告げて下さるが實に大聖出世の御本意であつたのである。其處で聖人は直ちに此の點を喝破して「釋迦世に出興して道教を光闡して……」と云ふて功徳の寶を施することを至す」と仰せられたのが誠に難有い。前より度々繰り反すが如く、釋尊を本として一行即

一切行、一佛即一切佛といふ具合に彌陀の本願念佛一行を一代佛教より味はう事も出来る、が更に進みて根源に逆上ぼりて見れば、阿彌陀佛が既に劫の昔に於て正覺を御成就なされ、五劫の間思惟して深遠の誓ひを起發して下され、永劫の間修行して弘く法藏をひらきて、えらんで功徳の寶を我々に施して下されたのである。撰んで功徳の寶を施して下されたとは、南無阿彌陀佛の一名號の寶をえらびて我々を救うて下さる事である。此を實に佛教の眞髓、他力信仰の根源、眞實の教である。眞に眞實の大利である。和讃には

恒沙塵數の如來は、萬行の少善さうひつゝ、

名號不思議の信心を、ひとしくひとへにすゝめしむ

ともある。此名號不思議の信心の外は何を爲た處が萬行の少善である、唯此無上寶珠の名號一つが阿彌陀如來撰擇施與の眞實の教である。尙ほも一つ言ふ時は教、行、信、證の四つなからが此の彌陀佛本願の外は無いのである。此の點より言ふ時は何も之が教である、之が行であるといふ區別して言ふ必要は無いのである。夫故彌陀本願は大經一部の宗教である、南無阿彌陀佛の六字は大經一部の體である。此外に大經は無いのである。此を教えて下されたが眞宗の教であります。併しなから猶ほ一步廣い意味でいふ時は、一代佛教は何處を見ても此の南無阿彌陀佛を説いて無い處は無い譯なのである。けれども特に此大經に於て佛は眞實佛教の根本彌陀大悲の本願を御説き下されたのであります。

扱て次ぎに此の眞實の教より眞實の行が来るのである。行といふはいふ迄も無く南無阿彌陀佛の一行の事である。之は

何うかと言ふに、既に名號を以て教の體とせられてあるのです。大經に於て長々と説かれたは、唯此の一佛名を御説き下されたのである。十方三世の諸佛も第十七の願より顯はれて、唯此の南無阿彌陀佛を御褒め下されたのである。此の大經一部の本體たる南無阿彌陀佛の一行、是れ實に我々が助けて頂く基礎である。其處で先づ教の次に此の南無阿彌陀佛の他力大行が顯はれて來たのである。

猶ほ此の味を今少し申しませう。上來言ふが如く、佛教の眞實の教といふは根本阿彌陀佛の本願である。其阿彌陀佛の本願は如何なる本願であるかと言ふ。選んで南無阿彌陀佛の一行を與へて下されたのである。修行によるでない、戒行によるので無い、唯此の南無阿彌陀佛を以て救はんと御誓ひ下されたのである。大聖釋尊の一代の教法が凡て各方面から此の念佛の一行を御傳へ下されたのであるのみならず、十方の諸佛も唯此の一行を稱讃する爲めに御出現下されたのである。夫も根本の阿彌陀佛の本願が、南無阿彌陀佛の一行であるからである。五劫思惟永劫の御苦勞の結果も唯此の南無阿彌陀佛の一行に外ならぬのである。親鸞聖人八十八歳御往生前の自然法爾章の初には、

獲の字は因位のときを獲といふ、得の字は果位のときをいかりてうることを得といふなり、名の字は、因位のときの名を名といふ、號の字は、果位のときの名を號といふなり、

と仰せられた。之は何かといふに、五劫永劫の御修行の結果は唯此一佛名である事を知らせ下されたのである。從來

眞宗の説教で阿彌陀佛が五劫永劫の御修行の結果南無阿彌陀佛を御成就下されたといふのは茲である。大もとに逆上ぼりて法然上人の撰擇本願を御唱導なされた書振から頂いて見ると、南無阿彌陀佛の一行こそ實に彌陀大悲の根本である、世に又となき念佛の大行であります。

私は色々の事柄から此念佛を喜ばせて頂きました。彼の綱島梁川氏は死なれる前年に於て非常に此念佛を喜ばれて、何故基督教には斯ういふ有り難き言葉が無いのか知らぬ、實に有り難い念佛であるが」と申されました。之を普通世間的に聞いて仕舞へば夫迄であるが、斯く迄深く基督教を味はれた綱島氏の口から申された此一言は實に有り難いと思ひます。佛教には昔から此念佛がある。此廣大なる全佛教の根本、釋尊出世の本意なる一番大もとの阿彌陀佛の本願が、此の名號を説き聞かして十方の衆生を救はんと御誓約である。一寸考へると我々が唯口に稱へて彌陀佛にすがる爲めの一つのシムボル（シムボル）のやうに思はれるかも知れぬ。併しながら若し單にシムボルであれば實に簡單であるが「行巻」には「吾が彌陀は名を以て物を攝す」と仰せられて、大悲の親の御恵の根本の此名號である。此の念佛一つの上に全佛教も皆籠つて仕舞つてあります。もう此以上は口で言ふ事が出来ぬ。其處で聖人も不可稱不可説不可思議の念佛と申された。此の廣大の南無阿彌陀佛の恵は十方世界に行き渡つて下され、我々も今現に口に稱へさせて頂いて居るのである。我々が斯く稱へる事の出来るのも實に念佛の御力であります。これが法然上人の御喜びなされた撰擇本願念佛であります。



撰擇本願の念佛と言ふ時は本願と念佛とか別々のやうに思はれるかも知れぬ、けれども之は元來一つであります。南無阿彌陀佛が則ち撰擇本願である、佛は、唯念佛の一行で助けると、念佛の一を撰擇して下されたのである、唯南無阿彌陀佛を以て助けると御誓ひ下されたのであります。佛陀が自から自分の境界をたのしんで御出下される日には南無阿彌陀佛は要らぬのである。我が彌陀は名を以て物を攝す、て、南無阿彌陀佛の一名號に佛陀全體を込めさせられて、其名號を以て我々を救うて下さるのであります。

其處で大行の念佛といふは、此南無阿彌陀佛の御名前を口に稱する事である。南無阿彌陀佛々々と口に稱へつゝ廣大の恵みを喜ぶ事であります。『行卷』の初めに仰せられたる御言葉に、

謹しみて往相の廻向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行といふはすなはち無礙光如來の御名を稱するなり。この行はすなはちこれ、もろ／＼の善法を攝し、もろ／＼の徳本を具せり、極速圓滿す、眞如一實の功德寶海なり。かるかゆへに大行と名く。しかるにこの行は大悲の願より出てたり、すなはちこれ諸佛稱揚の願となづけ、また諸佛稱名の願となづく。又諸佛咨嗟の願となづけ、また往相廻向の願となづくべし。また撰擇稱名の願となづくべきなり云々とある。諸佛稱名の願といふは即ち先きに申した第十七の願である。此の吾が名前の南無阿彌陀佛を十方無量の諸佛世界に知らしめ届けしめんと願である。即ち佛は此願を以て我々に南無阿彌陀佛々々と稱へて喜ぶ他力大行を御與へ下さ

佛の到らぬ國は無いと言つても善い位である。此程弘く行き渡つた南無阿彌陀佛の六字であるが、茲が甚だ大事である。其程弘く行き渡り、又此程久しく稱え慣れた念佛であるが、此の念佛を以て助けて下さる根本の御恵みを一つ頂かぬ事には、此の念佛の味は解からぬのであります。凡そ生れて親を知らぬ者は無い、其の如く荷くも日本に生れた人ならば、此の大悲の親の御名前を知らぬ人は一人も有るまいと思ふ。是れ既に十方衆生一人も洩らさぬ本願の御願はれてあれば、是丈けても念佛の偉大なる御力は頂かれるのであるが、しかし唯口に稱へて居る丈けでなく、其の念佛を與へて助けて下さる根本々願の親心を頂かねばならぬのであります。此の本願の御恵みを頂かずして唯口に念佛を稱へ居る丈けては信仰でも何でも無いのです。故に阿彌陀佛の本願の御親心を頂く事が實に他力信仰の眼目である。

偕て此の本願の親心を届けて下さるが爲めに佛は種々の御導きを垂れて下さる。大悲の親は苦の時でも、樂の時でも如何なる時でも此の親心を知らせんと親心を以て我々に臨んで下さるのである。若し佛に此の切なる御親心がましきまぬ時は、我々は人生に在つて信仰を得る事は決して出来ぬのである。然るに親は今この如く此の吾が親心を知らしめん、念佛を届け込さんと毎に我々の爲めに憂えて下さる。夫であるから、我々が人生の苦勞に堪へずして、我しらず稱へ慣れたる念佛を繰返しつゝある間に、時節到りて廣大なる親の大悲が此に充ち満ちて下さるのであります。親鸞聖人は善導大師の『往生禮讚』の御文を引きて『行卷』に宣はく

れたのである。夫故他力の不行といふは、無碍光如來の御名を稱するより外は無い。又、夫れ南無阿彌陀佛を稱することには口に珠玉を吐くが如しといふ御文もあります。夫であるから阿彌陀佛全體が此の南無阿彌陀佛に籠つて下さるのである。更に言を切にして言へば、一代佛教も此の南無阿彌陀佛の外に無いのである。三部經は言ふに及ばず三部經は固より阿彌陀佛を説かれた御經なれば言ふにも及ばぬ事、華嚴經涅槃經の御説法も皆此の一念佛に籠もつて仕舞ふ。『行卷』を拜讀すれば三朝淨土の七高僧は無論の事、臺教の祖師山陰の慶文法師、律宗の祖師元照法師迄皆此の念佛に込めて御書き下されてあるのです。法然上人は御一代南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本と御歎びなされた。私の毎に申す言葉であるが、念佛は實に佛の御慈悲である、御呼聲である、本願である、御恵みである、茲になつとも何とも申す事が出来ませぬ。

又善導大師は、南無阿彌陀佛の一名號の中に願行二つ共に具足せられてあるといはれた。南無といふは佛が我々を助けて下さる願である、阿彌陀佛といふは其佛の行である。而して此願行具足の南無阿彌陀佛といふ事がやがて五劫の思惟、兆載の修行である。佛は五劫兆載以來此の念佛を以て衆生に向つて下さるのであります。

其處で我々衆生は昔より此念佛を稱へさせて頂いて居る、生れて落つるより先づ此の念佛を稱へる事を教えられたのである。之を歴史的に言へば支那印度では七高僧以來、も一つ前では釋尊以來の念佛である。又我が國で言へば聖德太子已來の念佛である。又之を地理的に言へば吾が東洋で殆んど念

光明名號を以て十方を攝化したまふ、唯信心を求念せしむ。

と、佛は南無阿彌陀佛の名號を十方に響かせ、光明を以て十方を照らして、我々を遂に此の大悲本願中に引き入れて下さるのであります。そうして此光明名號の御催しによりて、最後に、あゝ有り難い御恵みであつたと、心に恵みの頂かれた時が、即ち此の親心を頂いた時である、やがて是信樂開發の一念であります。

私は毎々云ふことであるが、私が苦悶の時に、何處かに自分を恵む友達はないかと切に求めて居た。けれども求めて居る間は此南無阿彌陀佛を頂くことは出来なかつた。處が、あゝありがたい、佛こそ我を救ひ同情をよせて下さる友であつたと氣附いた時、佛の御慈悲がわかつたのである、これは全く先に申せし佛の光明名號の御育てによつてわからしめたのである。

法然上人が始めて氣附かれた第十八の願の名號といふのは親鸞聖人の目よりみれば第十七の諸佛咨嗟の願のいはれてある。此第十七願から教、行、信、證のうちの行が來た譯である。第十七願がなかつたらば、此行を得る事は出来なかつたのである。和讃に

十方微塵世界の 念佛の衆生をみなはし、攝取して捨てざれば 阿彌陀と名づけたてまつる

とある、十七の願により十方世界に念佛を廣めて、其念佛する衆生を攝取して下さるのが阿彌陀佛である。法然上人は此處の味に氣附かれて唯此南無阿彌陀佛の一つ



であると始めて云ふて下され、聖人は此法然上人の仰せ通り信受されたのである。歎異鈔の第二章は是れをいはれたのである。第二章のよきひとの仰せを蒙りて信するほかに別の仔細なきなりといはれた、其よきひとの仰せとは唯此念佛一行の本願である。親鸞聖人自身には實にあくまで煩惱の衆生である、無戒名字の比丘である。然るに此念佛がまはしませばこそと聖人は九十年間師法然上人より信受された本願を喜ばれたのである、即ち法然上人の御教化そのまゝ身にあらはれたのが親鸞聖人の信仰である。

法然上人の念佛の行と親鸞聖人の信とは別のものではない、親鸞聖人の信といはれたのは此念佛の行を心に信受されたい有様が聖人の信である。我々の心に南無阿彌陀佛の廣大なる願より信が来るのである。これは阿彌陀佛五劫永劫の御苦勞の念佛が心に至つて下された様をいふたのである。此様は日が出て夜があげたといふか、何ともいひ方のないありがたい様である。本願の文に曰く、

たとひわれ佛を得んに十方の衆生至心信樂して我國に生れんと欲して乃至十念せん、若し生れずは正覺をとらじとある。此至心信樂してといふことは我々のものでなくして佛の至心信樂が我々にとゞいて、遂に念佛が口に出る様になつたのである。教行信證の序文にも

それ惟みれば信樂を獲得することは如來選擇の願心より發起す、眞心を開闢することは大聖矜哀の善巧より顯彰せりとある。

昨日も監獄にて囚人が先生の言を正直に聞く事が出来ぬ故

親による事も出事ず、親として子による事も出来ぬ、こゝに至つてあらはれ来るのは眞實の佛の御慈悲の光明であつた。此刹那に病人は始めて「あゝありがたう我は此御慈悲を聞いて居たものではないか」と喜ばれた。(本號告白欄参照)此喜ばれ處は恰かも法然上人が往生之業念佛爲本と喜ばれた如く撰擇本願の南無阿彌陀佛による他はない、此期に至つては戒行も出来ぬと至心に歎はれたのである、私は先日其方の處へまゐりました、福間氏は非常に歎こんで居られ、かつ同病で悩んで居られる岩崎氏にも此歎びを分ち度いと非常に元氣にして居られました。和讃に

縦令一生造惡の 衆生引接の爲にとて  
稱我名字と願じつゝ 若不生者と誓ひたり

實に此廣大なるめぐみを信ぜさせていたゞけば、此如きありがたきものである。福間氏のいはれる様は、人が念佛せられるのを如何も前にはあかしもふたが、一體念佛といふことは如何いふことかと聞かれた。で私は經文を出して、先づ本願の文を拜讀して「至心信樂して我國に生れんと欲ふ」と申し、又願成就の文を出して、「信心歡喜乃至一念せん、至心に廻向したまへり」と申しましたら、それをふせていはれるには「我は今迄此文の事は少しも知りませんでした、今の私の心持は丁度全く此通りである」と歎ばれました。此何にも佛法を知らぬ人にも如來の至心が達いて下さるのが信心である。偕て一度信をうる時は即得往生である。我々は本來煩惱はあれども南無阿彌陀佛と喜ぶ時に淨土へ行く者と定めて下さるのである。行の巻には即得往生の即の字を解して

信が出来ぬと申しました。正直に聞く事が出来て得る信ではない、こちらはいつも間違つた、さく事の出来ぬ人間なれども如來の至心のまことがあつて始めて我々も信せずには居られなくなるのである。信の巻にも

たとへば阿伽陀藥のよく一切の毒を滅するが如し、如來誓願の藥はよく智慧の毒を滅するなり。

如來の誓願は能く衆生の智慧の毒を滅して、男女貴賤、老若賢愚に係はず信を得させて下さる、我々が惡をして居るのは勿論、善を爲しても我は善をなしたとあもふて居るのが善の毒、我は賢なりと思ふて居るのも賢の毒である。法然上人の御歌に

月影のいたらぬ里はなけれども  
ながむる人のこゝろにぞすむ

といはれた。

先日福間といふ方が信仰に入られました。此人は顔に瘡が出来て大層悩んで居られます。其方の御子が大層孝行て親の心身の苦惱に悩んで居るのを見かね、たゞ宗教によりて安んぜまゐらすより他はないと自らも念佛し又親にも進めて居られた。然しだん／＼と病苦がつるにつけ、もはや我慢しきれなくなつて、今迄頼つて居た妻子も遂に同情が届かなくなつて絶對絶命となつた。で、さすが親孝行の御子も遂に親孝行はもはや止めてある、信心も出来ぬと遂に珠數迄、親の面前で切つてしまはれたのである。こゝである、親孝行の爲の珠數は最後には切らねばならぬのである。聖人が父母孝養の爲に念佛は申さぬといはれたのもこゝである。かうなれば子として

即の言は願力を聞くにより光闡せる報土の眞因決定する時  
勉之極促也

といふてある。其一念の定まる時に現生で煩惱のまゝでも極樂の正定聚の一人として下さるのである。和讃に

超世の悲願きしより、われらは生死の凡夫かは  
有漏の穢身はかはらねど、心は淨土にすみあそぶ、

信の一念に於て必らず未來は佛のそばに行けるものと定まる次第である。現生に於ては十種の益を得るのである。勿論此世に居る間は煩惱具足の身なれど淨土にかへる時は實に何ともいふことの出来ぬ境界になるのである。歎異鈔に

盡十方の無碍の光明に一味にして一切の衆生を利益せん  
とまにこそさとりにては候へ

とあります。是が眞實證である。以上は教行信證の教より行が出て、其行を信する一念に證があらはれて來た次第を述べたのである。其證とは即ち涅槃の悟りである。釋尊は跋提河のほとりに於て涅槃に入られたのである。其涅槃の境界は如來常住無有變易の眞如の妙境界である。今極樂へ往生すれば我等も皆此境界へ入らしていたゞくのである。第十八の本願に「若し生れずは正覺をとらず」と御誓ひ下されたのが、此處である。そこでまた、第十一の願に「淨土に生れたものは必らず、滅度に至らしめん」と誓ひたまひたのである。此如來の御誓によりて我等命終るなり、極樂に往生する一念に生即無生の極樂無爲涅槃界に入らして下さるのである。此境界こそ證の巻に「彌陀如來如より來生して報應化種々の身を示現し給ふ」とある法身の境界にして、十方三世の無量無邊、同じく一如に乘じ



聖傳

ジャータカ釋尊傳

第四、富者チュルカラの話

てぞ二智圓満道平等、攝化隨緣不思議なり」即ち三世十方の諸佛の來現したまふ實一眞如の都である。我等臨終一念の夕彌陀の願力によりて大般涅槃を證して此都に入りぬれば、再び人生に歸り來りて、衆生濟度をする事自由自在にして即ち十方三世の諸佛の如く、又釋迦牟尼佛の如くである。是れが還相廻向の利益である。是亦二十二の願の御誓によりて廻向したまふ處である。以上教行信證往還廻向皆是れ如來清淨願心の廻向成就したまふ處より、我等罪深き煩惱成就の胸のうちに賜はる處である。此處を「眞宗教證を片州に興し、撰擇本願を惡世に弘む」と仰せられたのであります。

眞實の行といふはさきの教にあかすところの淨土の行なり。これすなはち南無阿彌陀佛なり。第十七の諸佛菩薩の願にあらはれたり。名號はもろ／＼の徳本を具せり。  
衆生の根本萬善の總體なり。これを信すれば四方の往生を得、これを信すれば天上の極樂をうるものなり。  
眞實の信といふはかみにあぐるところの南無阿彌陀佛の妙行なり。眞實の土の眞因なりと信する眞實の心なり。第十八の至心信樂の願のこころなり。これを選擇廻向の直心ともいひ、利他深廣の信樂ともなづけ、光明攝護の一心とも釋し、證大涅槃の眞因とも別せられたり。これすなはちまめやかに眞實の報土にいたるところはこの一心によるべし。  
眞實の證といふは、さきの行信によりてうるところの果ひらくところのさとりなり。これすなはち第十一の必至滅度の願にこたへてうるところの妙悟なり。これを常樂ともいひ、涅槃ともいひ、法身ともいひ、眞相ともいひ、法性ともいひ、眞如ともいひ、一如ともいへるみなこのさとりをうる名なり。  
《蓮如上人「教行信證」大意》

大聖ラージャガハに近きジャイヴハカのマンゴー園にありし時、若者ロードリングとよべる長老に關して説きたまひし話あり。  
今此話を始める前に如何にしてロードリングが生れしか、其願末を語らんとす。  
傳へいはく、ラージャガハの富家の娘、其家の奴隸と通して遂に逃れ出でぬ。  
彼等は或處に居を据へ、共に睦まじく暮し、が、妻は遂に妊娠して月滿ちぬ。婦はさすがに心細くや思ひけん、一日夫にかたからひて再び生家に歸らんことを乞ひぬ。  
されど夫は「今日行かん」「明日行かん」といひつゝ、徒らに日を延ばしぬ。  
彼女おもへらく「この愚なる者は、彼の罪の餘りに重ければにや、敢て家に行かんとせず、結局我が兩親こそ我が眞實の友たれ、夫の行く行かぬに係はらず、妾が爲に行く方優るべし」とて彼の留守に彼女は家をよきに整へて、唯、近き人々にのみ事の由を告げ、生家へと出て立ちぬ。夫は歸り來りしに妻の在らぬを怪しみしが、隣家より彼女の生家に歸りし

を知りて急ぎ彼女を追ひ行きぬ。

彼は道の中程にて妻をみとめしが折しも産の惱み起り、遂に男子出生したりしかば妻は彼に向ひて、

「我等の生家に趣むかんとする目的は早や路傍にて起りぬ。もはや其要なし、我等をして止まらしめよ」と。

かくして彼等はもとの家に歸りぬ。而して兒の路傍に生れしを以てロードリングと名づけたり。

彼等は又年を経ずして、先の如く生家に行かんとして男兒を路傍に生みぬ。是をもロードリングと名づけしが、先をはグレートロードリング（大路）と呼び、次をバットルロードリング（小路）と名づけぬ。

彼等父母の膝下に事なく育ちしが近隣の小兒等が、叔父、祖母等につきて談るを聞き、怪しみて母に問ふ様

「母よ、他の子等は彼等の叔父や祖母等につきて語れど我等は親戚なきにや」と。

「まことや、愛する者よ、汝等は此處には何の身寄りもなければ、ラージャガハといへる都に富める紳商の祖父あるぞかし、彼處には其他數多き親屬住めり」と。

「さらば、我等をして彼處に行かしめ給へ、母よ」と。

其時彼女は何故に彼處に趣むく能はざるかを告げぬ。されど兒等は切に繰り返し乞ひければ、遂に夫に向ひて、これらの兒等は絶えず、妾を惱ませり、例へ我等生家に行き、我親は我等を殺さんとも、來れ、祖父に我子をさみえしめてやは」といひぬ。

さなり我は彼等に面を合す能はされども、唯兒等を連れ行

かん」と。彼等は兩兒を携へてラージャガハに着しぬ。とある休息所に休みて後母は兒を伴ひ、生家に行きて兩親に彼女の來りし事を告げしめぬ。親は彼の娘のほろ／＼尋ね來りしをきいて

「息子も娘もまたぬ人は普通人にはなき事をかし、されど汝等は實に深き罪を犯したれば、我等の目前に立つこと能はじ、幾何かの價を取らなければ、何處にても生を送るべし、されど兒等は此處に連れ來れ」と答へぬ。かくして祖父に小兒等を送り、己等は幾何かの金を得て歸りぬ。

兒等は祖父の傍にて健かに成長し、折々は大路のみ祖父に隨ひて、佛陀の説教を聞きたり。かく絶えず、眞の道を聴くうちに大路いつしか出家の志を抱きぬ。一日祖父に向ひて「もし君ゆるしたまはば我法に入らんと欲す」と。祖父曰く「誠に我も汝を世のあらゆる人々のうちに於て法の人たらしめん事を欲す、努力して僧たれ」とて彼を師に連れ行きけり。

師曰はく「汝は息子を有するか」と。彼曰はく「然り大聖よ、此若者は私の孫なり、彼は佛陀の下に誓を取らんと欲す」と。

師僧を呼びて若者を得度せしめ給へり、乃ち僧は大路に身體の變り易き事に就きて靜觀の句を稱へしめ得度し終んぬ。

大路はやがて、經文を多く誦して、年滿ちければ、遂に大衆の一人として受け入れられ、ついで熱心なる修行により、阿羅漢果を得たり。かくして賢く聖き思より起る歡を樂じみしが、ふと小路をも同じ冥福を受けしめばやとおもひたり。

されば彼は祖父に行き願はくは我に承諾を與へて小路を



も法に入らしめたまへ」と乞ひぬ。  
祖父は、「彼を得度せよ、貴き人よ」と答へたり。かくて長老は小路を法に引入して彼に十戒を授けて是に隨ひ住せんとを教へぬ。されど小路は性來、愚痴にして四ヶ月を経るも次の偈をだに暗んずる能はざりき。

曉はやく、にほやかに

さける「コカナダ」百合のごと、

また大空にもゆる日の、

たとへがたなき榮もて、

かゞやき渡る君をみる。

昔カツサバ佛の時、小路は自ら大に學びしとは雖も、他の僧の經典を暗誦するに疎きを嘲りぬ。僧彼の己れを輕慢するを思ひ惱みて、益々學ぶに由なかりき。此の因縁を以て小路は法に入りしも愚鈍なりき。彼は一行を暗んじて次に移る間に先のをば悉く忘れ、遂に一偈を學ばんとして四ヶ月は徒らに過ぎ去りたり。

されば兄なる長老は彼に曰はく、「小路よ、汝は沙門にふさわしからず、たとへ一偈を四ヶ月間經といへども學ぶあたはず、汝は如何にして最高の目的に達せんと望み能ふや。去れ、僧院の外に」と彼を追ひ退けたり。

小路は佛陀の教を愛せずして俗人の生活にかへる能はざりき。

此時僧院に於て大路は衆僧に飲食等を配當する役なりき。

一日貴人ジャイヅアカ多くのよき香の花を持ち來り、マンゴー園に行き師に花を捧げて、説教を聽きぬ。而して後座より立

ち、佛陀を禮して大路の傍に行き問ふて曰はく、「此園に幾人の僧ありや」と。

「凡五百人」と答へぬ。

「佛陀と五百の大衆は我家に來りて、朝の食事を取りたまふや」。

「君よ、小路とよぶ僧は愚かなり、信に於て些かも進まず、故に我は彼を除く他悉く招きに預るべし」。

小路をさへておもへらく、「かく多くの僧に招待を受けて我一人のみを除かんとするは何ぞや、必らず我兄の我に對する愛は破れしならん、弟子たる利益は何かあらん、いでや、我は俗人となり、俗人として出來うる限りの善行をなさん」。

と次日早く世に歸らんとて出て行きぬ。

師は朝まだき疾く彼の思を知りたまひぬ。されば彼の先に小路の出づべき門にそへる路をゆきつ戻りつ待ちたまへり。小路は家を出づるや忽ち師を見奉りしかば、急ぎ佛の前に跪づきて佛を禮し奉りぬ。

其時佛のたまはく、「いかに小路よ、何方へ汝は行かんとするや、」

「君よ我が兄弟我を追ひしりぞければ再び世にかへりて彷徨せんとす、」

「小路よ、汝の教に歸命し奉りし告白は我下に於てせしにあらざるか、汝の兄汝を排するとも何の故に我に來らざる、俗人の生活は何を以て汝を益するや、汝は我と共に止まるべし」とて小路を伴ひ給ひ、佛陀の御寮の前に座せしめ、眞白き布片を與へてのたまはく、「小路よ、此處に止まり面を東方

に向けて座し、此布片を摩しつゝ「不淨を除く」「不淨を除く」と繰返し稱ふべし」と命じたまへり。

小路はジャイヅアカの家招かるゝ時迄彼の爲にしつらはれし座につき、教へられし如く稱へつゝ布片を撫てたりしが稍ありて先にすぐれて純白なりし布のいたく汚れし事に氣づきたり。おもへらく「此布片は我の撫てし故を以て遂に先の状態をうしなひ汚れぬ。あゝすべて事物は變じ易きかな」と、忽ち腐敗と死の實在を悟り彼の心眼は遂に開きぬ。

師は今や彼の心眼の開けしをしり、現に佛陀のましますが如き佛の幻像を送りて曰はく、「小路よ、布片の汚れたるを煩ふ事勿れ、汝の中にも亦愛欲、煩惱、罪障等の汚れあり、此等こそ汝は除かざるべからず」とて化佛は次の句を稱したまへり。

實の塵は愛欲なり、

汚れは欲の正しき名、

此汚れをば取りすてし

沙門を遂に汚れなき

世界にこそは住むべけれ、

まことの塵は怒なり、

汚れは怒の正しき名、

此汚れをばとりすてし

沙門を遂に汚れなき

世界にこそは住むべけれ、

まことの塵は惑なり

汚れは惑の正しき名、

この汚れをばとりすてし

沙門を遂にけがれなき

世界にこそは住むべけれ、

此偈の終りし時小路は遂に阿羅漢果を得、其功德によりて經典の總てを解するを得たり。

却説、貴人ジャイヅアカ招待の當日佛陀に捧物の水と呼べ

るを持ち來りぬ。師は御手もて鉢を掩ひて曰はく、

「ジャイヅアカよ、僧院にもはや僧はあらざるか」と。

「否我主よ彼處に一人も在らず」

「ジャイヅアカよ、一人の僧あり」と主は曰ひぬ。

さればジャイヅアカ人を送りて僧院に残れる僧なきやを見せしめぬ。

此時小路おもへらく、我兄は僧院に人なしといひぬ。いざ、われらは人あるを示さんと、奇蹟によりて、マンゴー園を僧もて満たしぬ、千人の僧各異なりし狀或は經を讀み、或は衣服を作り、或は破れしを綴りつゝありき。

使者僧院に於ける此等の僧を見てかへりて告げけるは「君よ、マンゴー園は僧をもて満ちぬ」と。

主は使をして再び往かして曰はく「師は小路を迎へたまふといふべし」と。

彼は行きき然いひぬ、然かれども千の僧各「我は小路なり」

「我は小路なり」と答へぬ。

使者惑ひて歸り其由を告げぬ。

「さらば再び行き最初に「我は小路なり」といひしものの手を捕へて連れ來れ、然らば残りの者は悉く消え去らん」と。男は命ぜられし如くなしぬ、かくして遂に長老は使と共に來れり。

師は食事の終りし時、ジャイヅアカに告げて宣はく、「小路の鉢を取れ、然らば彼は謝辭を述べし」と。

彼しかなせしに、小路は恰かも若き獅子の挑戦を叫ぶが如く、恐るゝ處なく、あらゆる經典の精神を短き感謝の説教



に含めたり。  
然る時、師は彼の座より立ち、大衆に圍繞されつゝ僧院に歸りたまへり。

かくて僧等、彼等の毎日の務を終へし時、大聖立ちて彼の室の前に於て彼等に説教したまへり。  
夜に入りて、僧等は教堂に諸所より集まり來り師の讚美を始めたなり。其集へる様は恰かも美しき「カマラ」華の戸張の如くなりき。彼等曰はく、「兄弟よ、小路の兄は彼の力を知らずして、たゞ四ヶ月も一偈を暗んずる能はざる所以をもつて彼を排斥したり、されど大聖の全能の力は彼を遂に阿羅漢果に達せしめ、遂に總ての經典をも了解するを得しめたまへり、あゝ、如何に大聖の力は大なる哉」と。

大聖は堂に於て話の起れるを知り給ひ、彼處に行かんと欲して、寢臺より立ち「オレンデ」色の下衣を纏ひ、恰も電光とみゆる如き帶をもて、「カマラ」華の紅きにも似たる真紅の寛衣を締め給ひぬ。除ろに立ちて佛陀は大衆の傍よりかに威ある歩を爲す如く、佛陀にのみ限られたる此上なく氣高き舉動もて大衆の室に入り給へり。

室の中央にしつらはれし玉座に佛陀の着き給ふや、六色の光を放ちたまへり。其様は恰かも若き朝日の地平線より山をこえてさしいて、大洋の深さに輝きひらめき渡るが如くなりき。僧等は彼等の話を止めて靜然たりき。師は彼の周圍を穩かに、かつ慈愛をもて眺めたまひしに、一手、一足と雖も動かす者なく咳聲を發する者だになし。若し佛陀語り給はずんば唯佛陀の榮光と威に壓せられて敢へて言を出す者なかるべし。

彼は其花束を賣りて、なほ多くの蜜を買ひ求め其蜜と一壺の水を荷なひて花園に行きしが、花作りは花を半ば摘み取りたる歡木を與へぬ。かくて彼は、暫時にして八ペニーを得たり。

一日嵐ありて、枯葉、枯枝、王の園に吹きしかれぬ。園丁は之を取り除く術なくして難澁せりしかば、若者は敏く之を知りて園丁に行き、曰はく、「我此等を掃除すければ木切や枯葉は我に與へ給ふべし」と。園丁諾なひて彼に與へんと約しぬ。

されば、彼は大に喜びて園に入り、枯枝枯葉等瞬くひまに集めて園の門に積みおきたり。王家の料理人燃料を求めつゝありしが、門によき柴數多あるをみて十六ペニーに買ひ求めぬ。かくして遂に彼は二十四ペニーの金持ちとなりたり。彼は又「よき事こそあれ」と勇みて市の門より程遠からぬ處に行き、一桶の水を運びて、五百の草刈りに飲料を供したり。

彼等「友よ、汝は我々に大なる務をなしぬ。われらは汝の爲に何をかなすべき」といひけれど、「君等は必要の時よき報酬をして給へ」と答へぬ。若者は心ゆるまず、彼方此方に行きて海、陸の商人等に交を結びぬ。

一日陸の商人は彼に「今日馬賣りは五百の馬を以て來るべし」と語りしかば、彼は速かに草賣りを尋ねて「今日願はくは各より一把の枯草を與へたまふべし、而して我れ其草を賣りさばくまで、君等は決して賣り給はぬ様、切に頼みまゐらす」と乞ひけり。

彼等は一聲に諾して五百把の枯草を彼の家に置きぬ。やがて馬賣りは市に入りしが草を得がたくして大に困難したり、

されば佛陀は天使の如き聲を以て兄弟等に告げたまはく、「汝等は何を以ての故に此室に集り、又我の妨げし話は何につきてなりしか」と。

「主よ我等は此處に於て世俗の事は語らず、唯、君の讚嘆のみ語りあへり」とて小路の話を告げ奉れり。

師乃ち曰はく、「僧等よ、小路は我によりて今法に偉大なる者となりたりと雖、嘗て前世に富に於ても我が爲に大になりぬ」と。

僧等切に乞ひければ大聖生死流轉の中にかくされたる次の譚を語りたまへり。

今は昔ブラマダツタ、ベナレスを統べし時、カーシの地に、菩薩は富豪に生れたまへり。成人してあらゆる寶物を譲り受け、其名をキューラカと呼ばれたり。彼は性伶俐にして事に堪能なりき、且つ種々の出來事に關して先見の明を有したり。

一日彼は鼯鼠の路に落ちたるを見たりしが其時の星影を觀じて、「明ある若者は是を以て商を始め妻を支へ得べし」と獨語せり。

よき生れの若者貧に苦しみつゝありしが、彼の言を聞き、おもへらく「彼は理由なきにかくの如き事を云ふものにあらず」と。直ちに鼠を取りて或店に行き猫に與へて幾分か的心附を得たり。是を以て彼は蜜を求め水壺に水を入れて森に行き、折から歸り來る花環作り等に小量の蜜と一坏の水とを與へぬ。花作り等は其禮として各自花束を彼に送りたり。次日

されば、彼の若者の草を有するを見て遂に一千ペニーにて買ひぬ。

數日へて彼の友は彼に海路の商人港に大船の來らん事を告げたり。彼は「此はよき企なるべし」とて八ペニーにて侍者數人つける車を借り、重々しげに侍者を供なひて港に行き船荷を一人して買はんと約し、其しるしとして指環を與へぬ。彼は、かくて程遠からぬ處に天幕を張り侍者等に曰ひける様「若し他の商人來り訪はば三重の禮を以て我に告げよ」と。

船の着せしをきくベナレスより貨物を買はんとして、數多の商人我先にと集ひ來ぬ。然るに彼等は、早や其貨物は或地の商人先約して悉く買ひ取りしを聞き大に驚き、若者に行きて己等に貨物を分たんとことを乞ひ、數多の金を出しぬ。若者かくして數千金を攫取したりしかば感謝の爲に、千金を取りて、富者チュルラカに行きぬ。チュルラカ彼の己が鼠につきて漏し、預言より遂に富を得し事の顛末をきいて大に感じ、「此の如き者は他に屬せしむる事情しき次第なり」とて己が娘に見合せ、巨萬の富を彼に譲りぬ。菩薩は彼の行によりて過ぎぬ。

佛此説教を終へし時、次の偈をのたまへり、

かすけき炎を養ははん

明ある人はいと小さき

都なりとも大なる

富もつ人となりぬべし。

僧等よ彼の若者とは小路にしてチュルラカとは我身是なりき」と。



## 告白

## 信界美談

菅 瀬 芳 英

今爰に信界美談と題して世に紹介したいと思ふのは、近頃一家悉く美はしき信仰に入られた神戸の紳商福間久米吉氏の實歴談である。氏は廣島縣の出身者で相當の教育を受け、特に英語を能くせし所より、久しくサミユル商會の支配人として、神戸の商業界に敏腕を振られた人であるが、舊冬以來俄然口腔の中に腫物が出来て、之を治療せん爲め東都に出て、爾來今日に至るまで根岸病院岡田博士の診療を受けて居られる。此腫物は至て難症で今日迄前後六回切開して、之が爲めに右の頬は半分程も欠損してしまつて、食物は僅かに管で咽喉の中へ注込んで居るといふ状態である。

氏には三人の令息があつて、長男の甲松君は、今現に法科大学に在學しつゝ、根岸の寓居に母と共に父の看護をなし、次男達吉君は神戸の自邸に在て、専ら園藝に従事して居られる。三男正吉君は甲松君と共に根岸の寓居に居て、熱心に父の病氣を看護して居る。此甲松君は至つて温厚篤實な人にて、父の病氣に苦む状を見て非常に心配し、肉體上の治療は醫師に一任するも、精神上の慰安は宗教に待つより外に道

がないといふ考から、同君が以前我同和學園に居られた緣故により、子に一度見舞ふて貰いたいといふ事を話され、子は本年の一月根岸の寓居に福間氏の病氣を見舞ふた。其時三十分程筆談せられたが、氏は見舞の禮を述べて後、自分は平素可なり衛生に注意し居れるに、今斯る難治の病氣に苦しむは何事ぞ、佛教には宿世の業といふ事があるさうであるが、一體加何なる譯でありますか、又佛敎とは如何、死んだ後はどうなるかなど、子に向つて種々の質問を試み、予は一應の説明を致したが、尙ほ別れに臨みて自今時々宗教上の話が聞きたいから、御苦勞を願ひたいと云はれた。之れが抑氏が求道の發端ともいふべきもので、其後予は大抵一週に一回位氏の病床に就て法話を試み、今に絶えず行つて居る。前田村上近角の諸師も一二回訪問して信仰を勧められた事がある。

氏は性來性急で、特に日夜病苦に責められて居るのであるから一層短氣になり、一生懸命に介抱して居られる令闈や令息に對しても時々無理なことを云ひ出して、随分困らせたこともあり、さすがに孝心深き甲松君も殆んど持て餘して居られたこともあつたさうである。それに口腔の瘡は何度切開しても其あとへ／＼と腫物が出来て、容易に平癒せず、短氣は益募りて來たが、唯余等が訪問して佛敎の話をする時だけは、どうやら心も穩になり、信仰といふ點にも大分心が傾いて、家内の人達も喜んで居られた。

處が同家に米吉といふ十年以上も勤めて居る下男があり、矢張り主人の看護に來て居る。生れは廣島縣で、母親は眞宗の信徒であるさうであるが、恰度其頃國元の母が大病で

あつたので、主人も大病、母も大病、何れも棄て、置けぬ場合であつて、心中非常に苦悶して居つたが、襖越しに時々聞いた法話で、一朝他力絶待の信仰に入り、其後は何事も佛の爲さしめ玉ふ所に従ふといふ量見になりて、今迄の心中の苦悶は全くなくなり、偏へに佛の御慈悲を喜びつゝ、益主人を大切に看護するやうになつた。

令室も豫て母親の感化を受けて、多少佛縁のあつた方であつたから、法縁を重ねるに従つて遂に信仰の門に入り、其後は如何に病人から無理を言はれても、少しも苦にせず、益柔和に振舞ふて、何れも信仰の上より喜び／＼看護するといふ様になつた。そこで本年の秋頃、御名號の幅や三具足などを求めて、朝夕の御禮は勿論、手に珠數を離さぬといふ熱誠なる信者となられた。

之より先き福間氏は眞宗聖典や假名聖教などを時々閱讀し、余も常に訪問して他力眞宗の信仰を勧めて居たが、或日の事淨土文類聚鈔の

噫弘誓の強縁は多生にも値ひ難く、眞實の淨信は億劫にも獲難し、偶々信心を獲ば遠く宿縁を慶べ、若しまた此廻疑網に覆蔽せられなば、更りて又曠劫多生を遍歴せん、攝取不捨の眞理、超捷易往の勸勵、聞思して遲慮する莫れ云云、の文に就て談話したことがあつた。此攝取不捨といふ事と、聞思遲慮といふ語に餘程感ぜしものと見え、氏は此句に關點を附して喜んで居られた。斯様に段々信仰の門戸に近づかれた。斯くて今秋十月二十四日第六回の切開をなした時、局部の疼痛は絶頂に達して、心身の苦悶遣る方なく、殆んど絶

倒せんとした刹那、フド我は既に如來に攝取せられ居る身なりとの感想が湧き出で、思はず佛名を唱へられたさうである。それから後は佛陀の救済を確信して、心中一點の苦悶なく、病氣も之が爲めに輕減し、慚愧の念より平素の短氣も全く起らぬ様になり、九て生れかはつた様な人となられたので、家内中の喜びは一方ならぬ、今は一家悉く法義を喜び、病狀に差したる變化はないが、今までは打つて變つて法悦歡喜の狀が自ら家内の中に満ち溢れて、昨今の福間氏は、とても大病人のある家とは思はれぬやうな感がある。

左に記載する獲信の記は、福間氏が自分て當時の感想の一端を書かれたものである。氏は外國語には非常に堪能であるが、邦文は餘り得意でないので、言辭は多少難澁であるけれども、言外に眞情が現はれて、却て力がある。今之を掲げて讀者に紹介しませう。

## 獲信之記

福間 久 米 吉

明治四拾年十月廿四日は余に取りて無二の恩謝日也、此日は余が佛即ち自然、自然即佛の恩寵を感得したる至鴻の紀念日にして、今左に當時を叙するは、世に同惠の慈光に悦浴せらるゝ人々の一人にても多からんことを期すれば也。

臥病十閱月、懊惱苦悶、心意の休慰何れに依るも要め得るものなし、身體進止の不自由は云ふ迄もなく、食の如き



も漸く飲送して、僅に餓渴を充たすに過ぎず、口舌は啞して其用をなさず、抑も余の病性たる、口腔内に發生せる難質の腫物にして、之が治術の初に當り、下顎骨の右方三分の一を切取し以て全癒を期したりしが、不幸其效を奏せず、切開又切開、遂に六回に及び、右頰下半部を全く切除し去るの苦痛を嘗む、眞に無告可憐の窮狀にあらずや、之に加ふるに片眼まきに明を失せんとし、且つ耳の下邊は炊衝を起し、其苦痛の狀到底筆紙の盡くすべしに非ず、此等の苦痛漸く減ぜんとすれば、又舌根の苦痛之に次て起り、其狀恰も時々刻々余の身體を誅殺せんとする者の如し、これ余が現時の實狀にして、之を思ひ彼を考ふれば、現世生存の趣味何によりてか之を解せん、狂するが如く亂するが如く、この五尺の體軀を如何に處して可なるべきやを知らず、夢の如くにして夢に非ず、我にして我に非ず、進まんか進むに由なし、退かんか退くに處なし、斯の如くにして余は實に煩悶苦悶の極項に達し、人類の失心する正に此苦痛の一瞬時にあるを思はしむ。

其刹那其瞬間ふと『余は佛陀が吾人を助け玉ふと云ふを聞きしものにあらずや』との一念、余が心頭を刺感したり、其は他なし、今春病臥以來長子甲松が余の病苦の狀と精神の煩悶を見るに忍びず、一日寸時たりとも心意の慰安を得せしめんと思推せし爲めか、佛界の長老、村上、前田、菅瀬、近角の諸師に枉駕を請ひ、余に法教を聽聞せしめしこと屢なりき。これ余がこの苦悶の瞬時計らず佛陀の救済を感想したる次第なり、而して此一瞬時の回想により今の今迄

堪え難かりし迷苦煩悶は頗に余の心頭より四散して、余は唯期せずして夢の如く自然と口に南無阿彌彌佛の名號を誦唱したりき、噫。

至大無上のこの光景を描寫する如きは、遺憾ながら余に其文字なし、たとひ余に文章の才有りとするも、尋常の人事に非る此感想を描寫せんは不可能のことなる可し、故に余は只其概容を叙するのみ、

斯の如く予は佛陀の晩起(余はこれをかく信ず)に依り、煩夢否煩惱より醒覺して以來、寂寞慘憺たる四面は遽に樂境の春風と變じ、觸目耳聞一として平安ならざるはなし、身は久しく重患の包圍する處となり、今現に其苦痛に惱殺せられつゝあるも、佛陀の慈光に照耀せられたると同時に、俗も病患は拭消せられたるが如く、精神は平然として全く患苦を忘れ、現在確實に前途の光明の赫々たるを思念し、誠に心意の安泰比するに物なし、この忽移急變に對しては、眞か夢か、有か無か、將た余は今本心を頓失せしには非ざるかと怪疑すること一再に止まらず、熟思靜慮二夜に及び、始めて知る、余は正しく佛陀の膝下に攝取せられ、佛陀の本願に副ひ奉り居りしことを、

茲に至て余は思ふ、この病患あればこそこの絶對無邊の大悲に浴し、萬世不滅の慰安に座し得るに至れりと、嗟呼余は何たる幸福ぞ、この清淨なる佛界の人生を味はひ得るに至れるを思へば、過去五拾年の前身消て幻の如し、罪惡深き余汚濁不淨の余をして、今此の特寵この慈悲に感ぜしめ給ひしことを思へば、誠に懺悔の情に堪えざるなり、

## 下

前項に記載した福間氏の獲信の記は、氏が信仰に入られた當時の告白の一端であるが、氏はまだ一書いて見たいけれども、とても信仰の妙味は口にも筆にも表はせないといふて居られる、實に其通りで誰れしも信仰の實感を強て言辭に顯はそうとすると、如何にも街ふ様にも見え、誇大に云ひ立てる様にも思はれて、動もすると他から誤解され易いものである、併し經驗のある人は一々それが語られるのである、信仰に入れば一種言ふ可らざる力を得て、之あるが爲に精神が常に安堵の思ひに住するのみならず、肉體の苦痛までも此力に依て減少することが出来るのである。福間氏は先月の二十七日に第七回の切開術を行はれたが其當日予と泉道雄氏とは、偶然相携えて氏の病氣を見舞つて、長時間互に信仰上の談話を交換したが、今直ぐに大施術を受けて苦しまねばならぬ場合合てあり乍ら、其間際まで、平氣で而かも歡んで信仰の談をして居られる、之が以前であつたならば、施術を受ける前日からして、其苦痛の狀を思ひ浮べて心配苦悶遣る方なく、自然家族や看護の者を困らせたりして大不機嫌であつたのである、然るに今日では凡て心身を佛陀に任せて居るから、施術の際でもそれ程苦しまず、主治醫の岡田博士も信仰の力の偉大なるには、今更の如く驚嘆して居られるようである。

先頃岩崎家の或人が岡田氏を訪ねて來て自分の主人も矢張り瘡の切開を二回程遭られたが、其苦痛は實に堪えられない、然るに福間氏は五回も六回も大施術を行つても左程苦しめられぬといふことであるが、一體どういふ具合でありますかと尋ね

たそうである、そこで岡田氏は信仰の力にて今は心身の苦痛を意に介せぬやうになつた次第を物語られたをうである、之を見ても信仰は一時の氣休めではない、其偉徳は肉身の苦痛までも慰める力があるといふことが分かる。

福間氏は其後頻りにこゝろいふ事をいふて居られる、世人が動もすれば宗教の信仰を以て、不健全なものと思ひ、宗教などいふ事は愚夫愚婦の信すべきもので、今日明治の教育を受け、新知識を有するもの、信じ得べきものではないといふ考を有つて居る者があるが、之れは信仰に經驗のない門外漢の空論で、事實をういふ譯のものではないといふ事を深く感ぜた。自分は多少の教育をも受け、常識をも有して居る積りである、而して口だけは瘡の爲に痛むが、身體は至て健康で、腦頭も亦健全である、決して一時の熱に浮かされて無暗に迷信した譯ではない、若し幸にして治療が效を奏して生命を維つことが出来たならば、此片輪の醜い顔を下げても構わぬ、宗教は智者も愚者も、學者も無學者も等しく信じ得べきもの、又信ぜざる可らざるものであることを世人に知らせたいと思ふ、此尊い佛陀の教が愚夫愚婦へのみ傳はりて、智者學者一般教育ある中流人士の間に餘り傳はらないといふのは如何にも残念である、どうかして佛教に遠ざかつて居る人達に、聞法の縁を結ばせるやうに努めなければならぬ、自分も今まで布教とか傳道とか、普通僧侶達が遣つて居る様を極冷かに眺めて居たが、今となりて考へて見れば、深く布教傳道の必要を感ずると共に、今の宗教界には眞の布教者が至て乏しい、僧侶も牧師も寺院も教會も多くは宗教を衣食の爲に利用して



居りはせぬかと思はれる、世の爲め人の爲めに利益を與ふるやう宗教を利用するのは當然であるけれども、自己の衣食の爲に宗教を商賣道具に利用しては、何事も形式に流れて、とても眞の感化は覺束ない、我々共がこんなことを申しては失禮かも知れぬが、眞面目に考へると如何しても斯様な感が起りて心配になります、自分は萬一餘命を繋ぐことが出来たならば、何か佛法弘通の御手傳をして御報謝の一分を盡したいと思ひます、以上は福間氏の病床に於ける、慷慨談である、一體福間家の家庭の圓滿なるは、先代の老母の感化が餘程あるそうである、令室の談に依れば、父は神様を大層信仰されて、家内一同にも毎日禮拜させて居られたが、母は又熱心な信佛家でありまして、どうかして家内中に佛縁を結ばせたいと、父に隠くして神棚の中へ竊に佛様をも入れて置かれまして位であります、それでも私等は其當時それ程有難いと思ひませんでした、近頃一家が佛法を喜ぶ様になりましたから、それがしみ／＼と難有く思はれます。

不思議な話ではありますが、其亡くなられた母が、今でも私共を導いて居られるのではないかと思はれます、いつぞや私が深い井戸の水を汲ふと致しましたが、腕が疲れて非常に重く感じましたが、やがて誰か力を添えて呉れる様な感じが致して、安々と汲上げたことがあります、其時フト佛様か力を添えて呉れられたように、何とはなしに感じたことがありました、又或時手紙を見ようとした所が、亡母が姿を現はして、そんな物を見るものでないと止められたことがありますが、果して其手紙は面白からん程に障るやうな事が書てあつ

になり、自然家事も整頓して居たのであるといふ事で、福間氏も成程信仰の餘徳といふものは力のあるものである、遠い地獄や極樂の沙汰ではない、今日の實務の上に自然と其の効果が現はれて来るものであるといふ事を深く感ぜられたさうである、之と同時に留主宅の者では、性急の主人が歸つて来たから、定めて八釜しい小言を云はれることであらうと豫期して居つたのに、今の福間氏は以前とは九て様子が一變して、小言を云ふ所が、非常に優しい人となりて居られるので、達吉君始め遇ふ者一同が、信仰の力といふ者は偉大なものであると感心し雙方か感心し合ふたといふ有様である、宗教も此所まで行けば立派なものである。即ち信仰の力が現在の動作の上に事實となりて活動して来る、之れが信仰の最も尊い所である。

斯くて福間家は久し振りで家族全體が寄合つたので、大病人のある家とも思へぬ程和氣藹々の有様であつたさうだが、數日を経て再び東京へ戻りて來られた、其別れの時、令室は達吉君に向つて、今は我福間家は皆々佛様の御慈悲を喜ぶ難有き身になつたのであるから、お前も佛敎を信仰して貰ひたい、家族一同が團圓して同じ御法を喜ぶ時に、お前一人が喜ばれぬといふでは誠に残念であるから、どうぞ佛法を心にかけて共に御慈悲を喜ぶ身になつて貰ひたいと、一連の珠數を與えて歸て來られたさうである、是等も實に美はしい心懸てはありませんか、尙令室の述懐によれば從來は病氣見舞の來客があれば、福間家の體面を損してはならぬといふ考から忙しい中にも酒肴を出したりして、それ／＼接待を致しまして、

たのであります、こんな事は夢でも見たようなお話でありすが、私には確かにそう感ぜられるので、こうして一家が佛様のお慈悲を喜ぶようになつたのは、皆亡母の一念が届て、亡母が常に私等を導いて下たさるのであらふと思ひます、私は今更なから亡母の御恩を深く喜んで居ますと、如何にも喜ばしく語られたことがある、世の冷眼者流は斯る話を聞くと、直ぐに迷信呼ばわりをするかも知れぬが、人間が眞面目になつた至極には、斯る感應がないとは決して云はれぬ、人の信仰はどこ迄も敬重せねばならぬ。

最後に今一つ紹介したいのは、信仰は人格を向上せしむるといふ事實である。福間氏が第六回の施術後、熱列なる信仰に入りてより、從來の性急も直り、勘忍の力か加わりて、我儘氣儘は少しも出ぬやうになり、性急の人が温厚玉の如き人格に變じたのは、訪問し来る親戚知友も誰とて驚かぬものはない、去月上旬少し病氣が良かったので、今一度神戸の自邸に行つて見たいといふ事で、醫師の許を得て夫人令息など附添ふて一週間ほど歸神せられたことがあつたか、約一年程も主人が不在であつたから、家事萬端定めて不整理勝ちの事であらふと豫期して歸つて見ると、なが／＼凡てが整頓してある、そこで福間氏は是れは感心であると思はれたが、能く聞いて見ると、留主を守つて居る次男達吉君の園藝の補助者として、日露戰役に重傷を負ふて退役となつた青木豊藏氏といふ少尉がある、此人は耶蘇敎の信者であつて、至極眞面目な人で、達吉君を始め召使の者にも時々信仰の話などをする所から、皆の者が感心して、主人の留主を大切に守るやう

隨分氣苦勞でありましたが、今日では左様な見榮を張るなどいふ心配がありません、大病人を抱えて多忙の中に酒や肴は出さなくとも、又たとひ先方の客人がどう思はれやうとも、唯眞心を以て接しなへすれば、佛様が見て居られますから、心には何の咎めもありません、今日では分外の見榮を張つたり、體面を繕ふ様なことは致しませんから、一家經濟の上にも幾分か徳があります、今は何蚊に付けて佛の御恩を喜ばして頂だいて居りますとのことである、斯の如く信仰の餘徳が到る所に實現して、今日の福間家は實に羨むべき家庭となつて居る、信仰の威徳廣大なることを世に紹介したいと思ふて、聊か予の見聞した一端を前後の別ちもなく思ひ出した儘記した次第であります。南無阿彌陀佛。

#### 本號の表紙繪

本誌の表紙繪は毎年圓按の大家京都高第工學學校教授工學士武田五一氏が格別の好意を以て特に本誌の爲めに執筆せらるゝ所なるが、氏は本年も亦非常の多忙に保はれず斯の如き清高の圖按を賜はりたるは實に吾人の感謝に堪えざる所なり。尙ほ圓の繪像は滋賀縣東淺井郡弓削村滿願寺の觀音の靈像を拜寫するものにして、土地の口碑によれば、往昔此の弓削村は弓削の守屋大連の所領なりしが、聖德太子守屋征伐の後深く志の成りしを喜び給ひて、特に此地に滿願寺を建立し此の靈像を安置し給ひしなりといふ。唯かなる事は知り難しと雖も、其靈然として威風に富み給ふ御容姿の氣流きは眞に稀有の名作にして、近年に至りて特別國寶に選ばれたり。聊か由來を記し謹みて武田氏の厚意を謝し奉る。



# 慶 嘆

## 八 一念横超

無始以來我々の方に向けられてある絶対の如來の御恵に到り届いて我々の身心に満入して下さる端的を信仰の一念といふ。之を譬ふれば、全くの黒闇中に忽然と東天に日の昇るなり前念までの黒闇が消えて、世界悉く明らかなるが如くである。此信仰實驗を私は時としては、釋尊の成道に擬して話すこともあるが、嚴密にいへば、大聖の實驗と我が信仰の經驗と對比するは他力信仰の上からは適當の所爲でない。何故ならば佛は救の親であり、我等は救はるゝ子である、大聖は慈悲ばかりであり、我等は罪ばかりである、其罪の衆生の些微なる經驗を佛陀の大覺と引當てるは、甚不遜である、恐入つたことである。去り乍ら、大聖の此世一代の方から云へば、釋尊成道の光景も我等が信仰に入つた状況も同じであるといふことが出来る。釋尊の成道したまふや、八萬四千の煩惱を退治して、八萬四千の光明を放ち給ふことは、全く我等の心に彌陀の佛日があらはれ玉ひ、我が信心が八萬四千の光明中に攝めら

る、光況と同様である、否釋尊の此世の方面に比してもよい程の尊いことである。釋尊成道の當時、百千の魔軍が退き去つて、心中に大慈悲の光りが輝き來つて、三千界を照す佛陀と成り玉ひた。我等も亦如來の光明が届いて下されて、信心開發して暗い胸が佛陀の恵に解け來つた一念、夜明けたところば云ふべからざる大なる一念である。其一念に就ては客觀的に見ずに深く各自の心中に味つて見ねば解らぬ。私の經驗から云へば左に求め右に衝き當り、少しも安心が無くてあつたが、後遂に佛の恵みの尊いことが頂かれて、一點あゝ廣大の慈悲が有り難いと喜んだ瞬間即ち一念である、これを親鸞聖人は信樂開發の時刻の極促と云はれてある、此心中ありくとして一種云ふべからざる念が顯はれ來るをは大無量壽經には聞其名號信心歡喜乃至一念と説いてある、此信心開發と一念開け來つたのが、即ち永久開けたのである、一たび心中に親が解つて見れば、再度親を忘れんとしても忘れられぬ、無くさんとしても、無くされぬ、實に金剛堅固の一念である。

他力信仰の上で、佛廣大の恵の事といふときは、佛の事のみ止まり、信心のこと、云ふときは、衆生の心のみ云ふは、似て非なるものである。今の信仰問題にせよ、舊來の安心問

題にせよ、佛を遠くに押しのけて置いて、客觀的に佛は此の如きものである、否佛は是の如きものにあらざるといふ研究になつたり若しくは信仰の一念にたのみ思があるとか、無いとかと内心ばかりを考へて斯く思はねばならぬ、あゝ思へねばいかぬと、心をこねまはすことになりたりするは皆また至らぬものである。佛陀が我心の天に、バツと出て來る其問題が肝心である。如來本願といふも佛名號といふも、又召喚の勅命とか光明とか利他の願海とかいふたは、皆絶対の佛陀の上であるが、それが心の方へ出て來たところてなければならぬ。近頃心持にかく感ずるなどいへば、それを實驗の信仰といふて居るがそれは間違である。眞實に佛陀の光明に氣附いたのが一念で、その次の一念が早多念である。これが和讃に「信心まことに得る人は、憶念の心常にして」といふ點である、一念開け來つた信心歡喜の心持は夜の明けた心持である、こゝが注意すべき點である、觀無量壽經には韋提希が獄中に苦しんだ時、釋尊の説法を聞いて廓然大悟して無生法忍を得たと説いてある、禪宗にも廓然大悟といふからこの他力眞宗と彼の禪宗と廓然に異なるなきが如くなれとも、然らず、他力信仰の上ではクワツと氣持がよくなつた、それがよいではない。佛陀

が心中に顯はれ來りて到底佛陀を疑ふこと能はざるが他力信仰であつて、日出づるとき暗一時に去る如く、佛が有り難いと云ふ時、心の暗が一時に晴れて何とも云へぬ味が廓然大悟である、これが他力信仰の上の肝心である、これが佛教の眞の眞たるところである。其一念開け來つた以上は、佛心と一體で、佛心が我心に入り了つてある、一念發起し了れば、自然に多念に流れ出づるが、當然のことである。信仰の一念一度發起する以上は、永久失ふことなく、日に月に朝に晩に佛の廣大の恵が、意識の上にはあらはれ來つて、口に稱へ身に喜ぶばかりである。時間的に云へば、其の如くであるが更に其心の内容から云へば所謂「信心二心なきが故に、一念といふ、これを一心と名く」或は専心とも、深心とも、決定心とも、眞心とも、淳心とも、大慶喜心とも名くべきである。

斯の如きの一念顯はれ來つて頓に佛心と融和し來れば、生死界を横さまに飛超へて仕舞ふ、仰佛の偉大なる心が我心に到り届いた一念の信心を、更に細かく云ふて見れば、眞實佛の慈悲、佛の回向が我心にあらはれて下されたのである。然るを和讃に「淨土眞宗に歸すれども、眞實の心はありがたし」といふは、無始以來の自性に於て云ふことで、佛心から顯れ



来るの眞實心は、佛の賜であるから歷々として我心に有る。慈悲心も亦然りて、佛の慈悲がなみ／＼として我心一杯溢れてある。又佛廣大の力が我等の上にツツと來て下さるのである。それであるから、聖人がこの事をいふに當つて、甚た力強いふてある、即ち現生に十種の利益ありと示して置かれたのがそれである、第一に冥衆護持の益といふは、佛心が頂けたものは信仰の爲に資格が上るから守るといふて、信仰の効を述べたるにあらず、佛心到來すれば多くの天、諸の神が守つて下さるといふ感じが自然に心の上に顯れ來るといふのである。又實際上此の如き事實があるといふことを示されたのである。其廣大なる佛の恵がなみ／＼と心に満ち／＼たるものは、満足富有の感ある、之を至徳具足の益と云ひ、佛陀を見認めるなり、内心の革命が出来るを轉惡成善の益と云ひ、彌陀佛の御親に遇ひ上るとき其佛後に從ひ玉ふ諸佛菩薩の悉く守護稱讃し玉ふの感あるを諸佛稱讃の益諸佛念護の益と云ひ、佛の恵を頂いて見れば何れに向つても皆歡喜の因縁ならざるはなきを、心多歡喜の益と云ひ、常に佛陀御親の懷にある心地を心光照護の益と云ひ、落て歡喜の中心たる佛陀に向つて、常に恩惠の廣大なるを感謝し、念々刻々その洪徳に報ゆる心

り來る、この一念の味これが横超である。

抑横超といふは、堅超に對し又堅出横出と並んで、親鸞聖人が一代佛教を判釋するに用ゐる名稱である。堅といふは此人生にありて此肉體のまゝして佛陀大覺の位に登る道である、横といふは此人生以外の極樂世界に生れて、彼國に於て佛陀と成る道である。もう一ツ云へば、我心以外に佛を見ず、我直に佛なりと自覺自悟するが堅の方である、向ふに佛陀が在して、我々がその佛陀によりて救はるゝが横の方である。我等は自分の煩惱を清めて、佛位に登るといふ堅の道では到底駄目である、此身を捨て、佛陀の御許に往く横の道が我等に相應したる法である。聖人の判教は、佛の説法から出たてもなく、又法門の理屈から論じ出したても無く、全く聖人の實驗的信仰の味である、この上に「出」といふは、漸々佛になるをいふのであつて、我々が修養の功を積んでそろ／＼と佛位に到るは堅出である、他の佛を念じて漸々善くなつて淨土に往生するは横出である、我等の信仰は此心是れ佛と力味むにあらずれば堅にあらず、横合から佛の恵が照らして下さるから横である、元祖の代に堅超といふは無い、聖人の代に、眞言宗禪宗等が盛に凡夫地から一躍して佛地に到ると説いて、即

か湧き來るを知恩報徳の益と云ひ、我等の自性から云へば、此肉體がとれて佛土に至つて佛陀となつての後に、初あて慈悲の心の起るはもとよりなれども、此世にある内も自ら行ふことはなけれども、佛力によりて一舉一動佛の慈悲を喜ばせて頂くとき、自ら他もまた佛陀の慈悲を喜んで呉れるようにもなる、これを常行大悲の益といふ。乃てこの肉體、皮を一ツめくれば、即佛陀である、之を入正定聚の益と名けたのである。日蝕の時日月が重つて仕舞ふて、世界が暗くなる、少時にして一點紅色の光が日輪の一方に出ると、頓がて周圍に一時に光を發して、ぐつと明るくなるといふことであるが、今亦之と同じように佛陀の恵が我が心に到つて一念歡喜の紅光出ると同時に、急に胸中が明るくなつて來る、このところに、自然に此現生の多くの利益が具はつてあるのである。此十種の利益は、元來佛陀それ自身の上に備はつてある徳が皆心にいつて來る、又願作佛心、度衆生心等のことも、我上にあるべきにあらずれども、佛の功徳が一念の信心の上に皆我心にいつて來るのである。此佛の心の満入することを圓融とも云ひ、圓滿ともいふ、これが又實に頓極である、頓速である、佛陀の光を見認むるとき、極めて速かにその佛の恵が我心に入

心是佛、即身成佛を談じた、これを堅超と名けた。次に念佛の功を積み、漸々修行を重ねて、往生するといふ方は、横であつても出と云はねばならぬ、今他力の信仰は、一念佛陀の光を見るなり佛に成ると定るが故に横超といふのである。世人動もすれば修養問題としては、三祇歷劫の方は取らぬが、即心成佛の道は我等の取るところであるといふものあり。されどこれ、實際には頗る難いことである、否到底駄目である。又横の教でも我々は佛を手本にし理想にしたり、又は想像したりして修養的行かんとする道も終には倒れざるを得ざる道である。親鸞聖人の教へられたところは一足飛びに横に超へる道である。此の如き横堅超出の判教は親鸞聖人の實驗から來つたものにして如何にも適切な教判である。

我曾て思へらく、天臺の五時八教の判釋は頗る面白いが、此横堅超出の判教は餘り感服の出來ぬまづいやり方である。然るに信仰の經驗がら見來れば、これ程適切な判釋は他にあるまじと敬服せざるを得ざるに至つた。繰り返へして云ふが我々は自分に行はんとするには、堅の道は到底企て及ぶべからず、横の道と雖ども漸々に進み行く方では、無限の距離があるから佛の境界へ行ける筈はない。無限の佛が無限の



力を以て佛陀の境に牽き入れて下さる願力攝取の法なればこそ行けるのである。修養的に、漸々と進む方は各自の器量が一樣でないから、上中下の三輩とか或は三々九品とか、種々無量に階級差別を生ずるは勿論である。全然利他佛力の救済に従ふに於ては、信仰に淺深も無く、階級も差別も無い、信巻に大願清淨の報土には品位階次を云はず、一念須臾の間に速に疾く無上正眞道を超證す。

と云はれてある、あゝ有り難いと親の恵に氣附く一念に、親心が満ちて來たのである。信仰はこれより外にはない。如何に世間からは立派な人と云ふものでも、我れ孝を爲せりと云ふならば、眞の孝子とは云へぬ、親を少しぐらい、好くしても我れを生み育て、下された廣大の恩に向へば一生を傾け盡しても、親の恩に報することが出來ぬ、如何に善を積めばとて、我こそ善を爲せり坏と云はゞ、絶對の親に對して非常の傲慢のものである。たとひ聖道門の人でも我れ善を爲せりと云ふならば憍慢である、禪宗の悟りを得たる人も、佛恩を喜ぶ感謝で行かねばならぬ、私共禪者の話を透して、我が佛陀の慈悲を喜ぶことが出来る、若し我こそ佛になれど腰を据へた日には屹度間違つて居る「何處惹塵埃」といふまでに、悟つたな

嘆

咏

## 大悲本願

甲

之

波しくしく  
寄せてはかへす  
大海漕きたむ  
小舟のすがた  
消ゆるが如き  
かなしき人の身。  
目に見る形の  
疑なければ  
移ろひかはる  
此世のさやり  
人の罪  
絶えせぬあらし  
底ひをゆすり  
滅びにみちびく

らば、いよいよ法界に向つて感謝して居る。乃て極端に云ひ放てば、此佛の恵以外に佛教は無しといふべきである。それであるから善人悪人何れも佛の恵を見るときは、皆同じことである、更に違ひはない。ランプが明く、カンテラは暗く、電氣灯は何よりもズツと明るいといふても、それは夜の間の比較である、東天日出づるときは、最早皆同じである。信仰問題もこれと同じであるその代り、暗中に居りて明るい氣持して居るならばそれは夢中の晝であるから目醒めたときは深き夜である、此無明の黒闇は、必ず佛陀の恵の光によりて照らし破らるべきものである。一切衆生悉有佛性といふは、此點である。華嚴經に説かれたる佛の眞實は此絶對の佛陀の眞實である。涅槃經の如來の慈悲は此絶對の如來の慈悲である、一切經は皆唯一佛陀の恵を説けるものに外ならずして、一切衆生は皆平等に、此佛陀の恵に入り同一の信仰を喜ぶべきである。他方の信心は善惡の凡夫ともに佛の方より賜はりたる信心なれば、源空が信心も善信房の信心もさらにかはるべからず唯一ツなり、師弟老少皆一味平等の信心である。これが一念横超と云はるゝ點である、其一念の信心が我々罪惡の心に至つて下さる有様が涅槃の妙味である。

闇を破り

光の一すぢ

死に行く今はに

佛のみ國を

あふぎ見せしむ。

言絶え思絶ゆ

人の世ほろぶる

盡させぬよろこび。

身をすてて

人を救はむ

み佛の願ひの力故

生けるかひありと

あふぐ目に涙さしぐむ。

行 誠上人

初をへて天の羽衣なでて見よつきぬやこれのいは根なるらん。  
うへもなき玉のうてなもおく露のしげしげぬまの光なるらん。  
うれしと人とうまれてみ佛のさとり道の道もこれよりぞしる。  
つの國の蘆の八重ぶきひまをなみつとめし常に南無阿彌陀佛。



附記 從來第二求道會に於ては後藤、渡邊、小澤、並山の四君毎に凡ての勞を取り給はりしが、渡邊君は昨年九月より故郷に於て専ら傳道に従事せられ、又後藤君は今度學校より選ばれて渡清の上敎育事業に就かるゝ事となれり。吾人は茲に謹みて四君の勞を謝す。



尙ほ近角は舊臘廿二日第三日曜を以て昨年の求道講話を終り、其夜直に出立故郷に於て報恩講を執行すべく歸國の途に上り、本月十二日第二日曜講話迄には歸京の豫定なり。

### 其後の求道學舎

求道學舎も又幸に佛天の加護を蒙り、各自日々信仰の道に進みつゝあるは、吾人の毎に感謝に堪えざる所なり。現今在舎人員は近角家族共に凡て十八人にして、各室共一人の空席なく、尙ほ幾多諸君の入舎希望に背きつゝあり。而して近角は常に此等在舎諸君の中心となり、朝には一同袖を列ねて佛前に詣り正信偈歎異鈔御一代開書等を拜讀して先づ一日の恩寵を感謝し、夕には團欒食卓を圍みて或は信仰を語り或は無邪氣なる談話に一日の勞を忘る。特に意を用ゐずして而も自から各自行く可きの處に向はしめらるゝは誠に大悲善巧の指導によらずんばあらず。尙ほ從來學舎に在りし吉田耕輔君は農業研究の爲め十月廿日横濱開港の加賀丸を以て渡米せられ、舎に於ては其前夜粗末なる晚餐を共にして同君の行を送りたり。殊に此時は來京中の同君親父も出席せられ、元氣ある物語を以て席上を賑はされ、一同勇ましく別を告ぐるを得たるは吾人の今猶ほ満足に堪えざる所とす。又猪股昌輔君は昨冬を以て醫科大學の業を卒へられ今春よりは福岡醫科大學久保博士の許に於て耳鼻咽喉科の實地研究に着手せらるゝ筈、又石川慈惠君は今回突然に沼津幼年監に於て身を捧げて教育並に傳道の業に従はるゝ事となり既に去月廿五日を以て任地に向かはれたり。而して舎は十四日の夜に於て例の如く晚餐を共にして聊か兩君の發程を祝したり。吾人は此等の諸君が幸に各種の方面に於て實際的人生に接觸し彌々信仰の光を發揮し給はん事を切望の情に堪えず。

### 求道學舎の報恩講

求道學舎に於ては從來年々宗祖の報恩講を勤修し來りしが、

殊に本年よりは十一月廿八日聖人御往生の當日を以て今後永久に求道學舎の報恩講期日と定め、學舎に有縁の者は此日を以て残らず相會して聖人の洪恩を感謝する事に決し、先づ本年は同日午後六時を以て開會したり。同日近角に於ては特に佛前の打敷を新調し香草を設けて時の至るを待ちたりしが、定刻に到りて集まる者現時在舎の諸君と共に凡て廿六名、萩野、八田の二學士も來會せられたり。先づ一同卓を圍みて質素なる精進料理の晚餐を共にし、夫より佛前に集まり佛前にぬかづき恭しく拜禮の後正信偈並に歎異鈔拜讀したり。勤行ありて少憩の後近角は又謹みて御傳鈔二卷を拜讀す。毎朝參拜する佛前も此の日は殊に鮮かに拜されて嚴かなる事言ふ可くも無く、一同六百年の昔に歸へりたる心地して何れも聖人の恩德に感激せり。夫より更に階下の一室に集まりて茶菓の間に聖人の御苦勞を偲び、大悲の救済を喜ぶ。特に此日に於て吾人の最も感謝に堪えざりしは、石見國より態々求道の爲め上京來舎せられたる木村春雷師の出席せられたる事にて、同師が熱誠眞摯なる告白は痛く一同の胸中を刺激し給ひ、談は彌々進みて各自の安心問題に入り、互に遺憾なく告白し、遠慮なく警醒して時の移るを覺えず、最後に又の會合を約して相別れたるは午前の二時なりき。誠に求道學舎近來の嚴肅眞面目なる聚會にて、斯くの如き難有き會合を賜はりたるも偏へに佛眞の御哀れみなるを思へば更に感恩の情に堪はず。

### ▲求道學舎日曜講話題

極清極惡	十二月八日
念佛爲本	同 十五日
圓顯惡惡	同 二十二日
一貫の大道	十二月 七日
他力の淵源	同 十四日
本誓重願盡しからず	同 二十一日

### ▲第二求道會講話題

謹んで新年を賀し  
たてまつる

明治四十一年正月元旦

東京市本郷區森川町一番地

## 求道發行所

### 求道第四卷第六號

本號には特に近角講述「眞宗慶歎」七項を掲載す。頁數並月の一倍以上。

(但し價定一部金貳拾錢)

右僅少の殘本有之候御入用の御方は至急御申込願上候

## 求道發行所

## 精神界

第七卷第十二號目次

- ◎清新なる信念◎倦怠◎至善の一◎至善の二
- ◎自他の人格
- ◎涅槃篇
- ◎現代學生の宗教思想
- ◎箱根權根に參籠して親鸞聖人を懷ふ
- ◎明慧上人を論じて日本佛教の特色に及ぶ
- ◎心境相奪
- ◎客觀主義の超脱
- ◎如來の願舟に乗せよ
- ◎閻洞
- ◎心織體用
- ◎暮秋歎
- ◎東京より
- ◎握られぞの往生◎御名の力◎御名の教訓◎讃頌の任◎昊天恩

多田 鎮  
曉 島 鏡  
佐々木 月樵  
和田 龍造  
會我 益深  
安藏 州一  
櫻部 慈明  
青鬼 堂  
清澤 滿之  
柏原 祐義  
記 者

發行所

東京巢鴨三五  
振替三三三三

無我山房

月刊雜誌  
一部十二錢  
一年一圓卅錢



宗教及哲學之研究

日 五 月 一

# 無盡燈

第拾參卷第壹號

定價 壹部十錢 半年五錢 一年十錢

心靈及時潮之指針

## 目 錄

- ◎無着論師と別時意趣 齋藤唯信
  - ◎日本天台慧檀一流の異義 上杉文秀
  - ◎起信論の諸宗に及ぼす影響 河野法雲
  - ◎宗教的經驗の種々 福來友吉
  - ◎六字名號の具德 小原一體
  - ◎立川流の沿革及淨土教に及ぼしたる影響 山田文昭
  - ◎親鸞上人の偉大なる所以 近角常觀
  - ◎信仰問答 安藤洲一
  - ◎迎春の辭 記 餘 花 者
  - ◎丁未宗教界批判 旭 生 川
  - ◎大夢庵道人に酬ゆ 鳳 溪
- 附 錄
- ◎梵文妙法蓮華經和譯 南條文雄

發行所

東京巢鴨眞宗大學

無盡燈社

(口座四二六八)

## 雜誌創刊

# 家庭講話

(毎月一回一日發行一部六錢一年七十錢郵税不要)

方今の雜誌界を見るに、或者は餘り難しく、或者は餘り野卑であつて、家庭の清浄の主義に立つもの、或は少なからず、殊に一種の偉大な(一)家庭の全員の味に立つもの、或は少なからず、殊に一種の偉大な(二)之を如來他力の偉大なる根底の上に立て、しかも(三)過去現在未來のあらゆる問題に對する解決を與へんとするものである

眞宗大學教授佐々木月樵撰

# 秀存語錄

全一冊クロース綴上製定價五十錢郵税六錢

本書は、どうして安心が出来ず、信仰が頂けぬ所から、常に眼を聖教にさし、深夜俄かに名師の門をたゞ、或は高僧といふ高僧に接ふて種々の教を受け、一身は一派の學頭にてありながら、名も知れぬ愚痴無知のいふことも、これは實感の餘蘊なれば、丁寧の之を記し置きて、それを自己の一生の修養に供へ給ひし一輩院秀存講師の全語録也。一部總じて二百五十五章より成る。是を以て師が命がけの御示談は、少くも文字のよめる人ならば何人も本書を細く時は、そのあたり之をさくことを得る也。

## 第一號目次

法 話	南 條 文 雄
信着の生活	山 田 文 昭
心のささ處	阪 井 習 學
和合の基	柏 原 祐 義
人の忠告を心よく受くべし	赤 沼 智 善
夜の花	鳴 村 善
御世の春	夜 部 善
星 佛	江 部 善
蘇 生	大 谷 鏡 石
月と鬼	湘 川 風
鏡臺の愚痴	旭 川 風
奥さんのはれ着	佐々木月樵
良寛上人の事	阪 井 習 學
歌かるたの教訓	柏 原 祐 義
抄 錄	通 信

發賣元

無我山房

(振替三二二三番)

東京巢鴨二ノ三五



何は物産大一の界教宗るけ於に代現

佛敎  
名家  
說全  
集

思想に遅れをとるの憂なく布教資料其多きに苦まん

法藏館編輯局  
製本  
總和口口上夷金文字入紙半洋綴美裝千二百頁内外

本名大  
載諸  
說れ  
書る  
のに

南條博士、村上博士、前田博士、井上博士、大内居士、雲雷律師  
清澤居士、近角師、赤松師、蘭田師、釋宗演師、齋藤師、默雪禪師  
他致界新進名家十數名、境野黃祥師、曉鳥敏師、佐々木月樵師、其  
松本博士、谷本博士、姉崎博士、海外にては井上博士、加藤弘之博士

論說欄に諸大家の重要問題解決  
 實踐欄に眞行に徹切家庭人に対する諸師の名譽  
 感話欄に諸大家の感想の告白揚  
 修養欄に多岐列る  
 信念欄に諸大家の實験實  
 社會欄に早時の社會と宗教と  
 雜錄欄に何れも興味ある無盡藏也  
 他山石

安州一著  
●安恩  
錄二十五錢  
小倉了誠著  
●信仰のすゝめ 十二錢

大須賀 秀道著  
● 信 仰 講 話 二十五錢  
● 新 百 譯 量 由 著 喻  
經 十 六 錢

藤谷還由著  
●極樂世界觀二十五錢  
靈應彌陀有無觀十二錢  
●地獄極樂

信仰之餘瀝

近角常觀著（再版準備中）

人生と信仰

近角常觀校訂（再版）

冠頭  
歎  
異  
鈔

發行所

近角常觀著（第四版準備中）

懺悔錄

發行所

賣捌所

東京市本郷區春木町  
二丁目二十一番地  
東京市本郷區  
森川町一番地

森江分店  
求道發行所

規定

一、本誌は毎月一回一日發行とす

本誌は一切前金にあらざれに

一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事

但垂券代用の節は五厘切手にて一割増の事

本誌の諸讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべし、轉居の節は所舊兩所の住所を通知する事

く轉居の節は親舊兩所の宿所を通知する事

一、回答を要せらるゝ

金拾錢	一部
金拾錢	一ヶ月
金六拾錢	六ヶ月
金壹圓拾錢	一年
に付五厘	郵税一冊

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

爲替辰入局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所宛」の事

爲替受人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」と

せらるべし

明治四十年十二月廿七日印刷  
明治四十一年一月一日發行

發行兼編輯人 近角常觀

印刷人白土幸力

東京市本郷區森川町一番地

發行所 求道發行所

東京市神田區神保町

大賣捌所 東京堂

豫約申込所 東京六条市 電話二二五二番 法藏館

進歩せる布教家の大寶庫なり



前號要目

求道

◎歸命之意義

感謝

◎御正忌◎御傳鈔◎御往生◎其一人は親  
戀なり

講話

◎深籍本願興真宗

聖傳

◎チャータカ釋尊傳

第三「シー」の商人

感謝

◎聖蹟巡拜

講義

◎歛異鈔第五章

慶歎

近角常觀

◎眞宗慶歎

近角常觀

六 信樂開發

七 大悲回向

歎咏

◎戀婦娘(短歌)

◎新作舊作(同上)

時報

◎熱田◎仙臺◎教誨師講習會

左千夫

増田甚

鈴木 悌